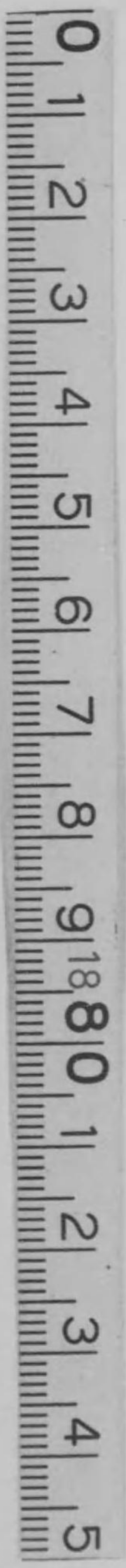


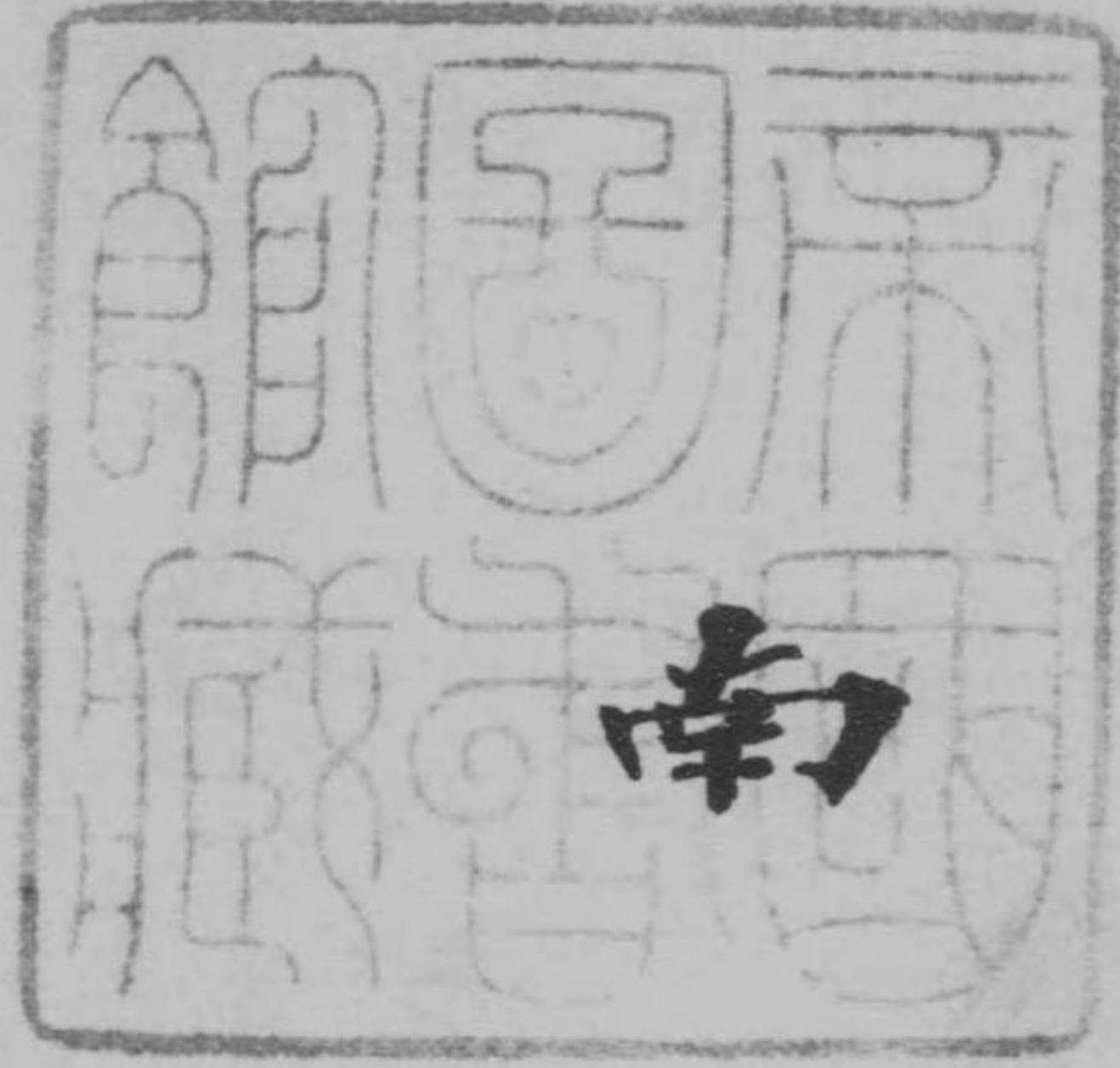
661
190



始



34



南

記



66/190

序

66/190

歐洲文物の東漸は初め葡西兩國より入りしものと、後に和蘭より到りしものとの二潮流ありて、その中間に禁教と鎖國との二大打撃ありしがために、南蠻の黒船が載せ來しそれは、大方亡びて而も遺しし痕跡きはめて薄く、そぞろに騷人の情緒を動かし史家探古の念を促がすこと少からず、紅毛の帆船が寄せ來しそれはいみじき抑壓を忍びつつも遲遲として弘通したればその漸進の經過をたどるに文化史上の興味溢るるばかりなり。今本書の收むる所は、すなはちこれらの詩趣史興より發して、主として西學東渡の沿革を叙述し或はその資料を供給せる十數篇を骨子とし、配するに足利時代の南國交通および倭寇の史蹟と近

序

代琉球の文献とに關する蕪文數篇を以てす。從ひて全篇斷片ながら西力東進史に日本洋學史に聊か貢獻する所あるべく、併せて國民が南方發展の史實を含めりといふも誇稱にはあらず。若し夫れ八幡船の西征し朱印船の南下するあたり叙事詩の料ありとせば神國に邪宗を弘めし罪咎重く永劫打拂はれし南蠻船のあとは戲曲の片影を認むべく、出島と爪哇との間を來往する紅毛船の白帆には悲しき抒情詩を誦し得べきにあらざるか。著者元より詩想に乏しく篇中これら好箇の詩料をして躍如たらしむる能はずといへども、以て騷客諷吟の取材に備ふるに足るべきふしあるを疑はざるなり。

大正四年七月二十八日

新村 出

南蠻記目次

南風 (極東流竄の詩人カモエンスを憶ふ)

- 一 黄金が島……………一
金島傳説……マルコ・ポーロと日本……希臘南島の物語……東洋の黄金島と西洋の探險船
- 二 佛郎機人の渡來……………七
支那に渡つた南蠻人
- 三 亞媽港とナポリ……………九
ナポリの情趣……廣東と蕃舶……ゲートとナポリ……南北の對照
- 四 媽港の詩仙洞——倭寇と詩人……………一五
媽港の地勢風物……カモエンスの詩仙洞……倭寇と葡人……倭寇とカモエンス
- 五 カモエンスの生涯……………一九

目次

多感なるカモエンス……カモエンスの家筋と生立……詩人の戀……カモエンスの
從軍……東遊……媽港流謫……隻眼の新島守……四歸……カモエンスの最後

六 『ルシアダス』と百合若物語……………二七

發見時代の葡萄牙……カモエンスと井ルギリウス……ルシアダスの名義……ウリ
ツセスの西航説……ウリツセス物語の東漸……傳來の筋路

七 叙事詩に描かれた支那と日本……………三四

彼に歌はれた詩仙洞……詩曲中の日本……神女に誦せしめた日本……船歌きこゆ
……勇士と神女との國見……支那の諷刺……日本を詠す

嶺南思出草……………四二

サンマルコ寺の仲見世……ダンメンチオの新劇……エネチアを去つてポー川を渡
る……ゲーテの伊太利亞紀行……船頭の磯節……フェルララの今昔……名曲タツ
ソ一の舞臺面……新曲の捧呈……月桂環……室町時代の懷古……年若き遣南使節
……使節一行のエネチア入り……畫工チントレット……遣南使節と豊太閤

鎖國……………五五

兼好法師の鎖國説……ケンベルの鎖國説……南北文明の交替……鎖國の利益……
鎖國の時期と程度……吉利支丹の感化……西方文明の執著と鎖國の恨……耶教の
禁歴と佛敎の振興……支那文物の輸入……長崎の神社……長崎の聖堂……書物改
役……向井元升……乾坤辨説……時代後れの天文説……林道春と耶蘇敎……向井
氏一家……去來……元祿時代の世相……耶蘇敎の排撃……蘭人の江戸參禮……奇
器洋書の獻呈……蘭人の利用……新代醫學の東漸……新代星學の傳來……日本研
究家……西洋人が日本近海の探究……ケンベルの渡來……ケンベルの鎖國論……
紅毛も花に來にけり馬に鞍(芭蕉)……カピタンをつくばばせけり君が春(芭蕉)……
……犬公方再度ケンベル等を上覽す……ケンベルと奥醫師……檢夫爾將來書目……
ケンベル船載の西鶴の櫻陰比事……長崎通詞の蘭學……鎖國の悲哀と滑稽

沈鐘の傳説……………九一

月ひとつ鐘は沈める海の底(芭蕉)……鐘と龍神……筑前の鐘が岬……萬葉の古歌

目次

……切支丹……孟子

檀の葉

長崎のほひ……長崎の地方色と文藝……長崎と學者……蜀山人……檀園……貞

徳……三千風……去來……山陽と星巖……佛郎士歌……中島廣足……鶴峰戊申……

……山陽の詩と檀園の歌……國學者と漢學者……樺島浪風記とシーボルト……檀園

の詠紅毛舶入貢歌と山陽の荷蘭船行……青木永章……唐船の歌……支那の芝居……

……廣足と蘭學……廣足と外船

古渡りのゴブラン織

南島を思ひて

琉球歳時記……絲柳の唱歌……島物語……西人の琉球語彙……英船の琉球物語……

……那翁と琉球……英船員の別離詩……伊波氏の古琉球……おもろ……鶯の歌……

八重山宮古の方言……波行音考資料……支那人の琉球語彙……劉孔當の夷語音釋

……夷語夷字の出典……PF二音の變遷……FH二音の變遷……琉球語の史的研究

日本一と日本晴

時代語……御伽話……平安朝の物語……中世の軍記物……謡曲……狂言……足利

時代の覇氣……鎖國時代……俳諧……笑話……天下一……天下一號の禁止……三

國一……日本晴

倭寇時代の俗謡

俗謡調の詩……日本風土記……山歌……集中の絶唱夫婦妻接……雜唱小曲と隆達

節……憶中華調……雄飛時代……雄飛する日本人

足利時代に於ける日本と南國との關係

(一)

緒言……義滿時代の日本と支那……極東三國の一新時期

(二)

金剛三昧の渡天と眞如親王の入竺企圖……平安朝時代の南海……平安朝時代の

目次

南蠻……高麗と南蠻との混同……南蠻の漂來……大食人の高麗通商……日本と波斯

(三)

足利時代の南蠻……天竺人

(四)

亞刺比亞系天竺人の渡來……暹羅人の渡東……暹羅使節の入鮮と倭寇……扶南

(五)

若州小濱の南蠻船……若狹と唐船……貿易港としての小濱及び京濱間の交通……日本と三佛齊(舊港)……亞烈進廻と施進廻

(六)

爪哇人と日本……博多と琉球南蠻

(七)

南國への倭寇……廣東への倭寇……倭寇南侵の限界……琉球と滿刺加……ゴール

スは高麗か……琉球と爪哇……琉球と暹羅……滿刺加のゴールスは日本人か琉球人か……佛郎機人上川島に來る……上川島に於ける日葡人の接觸……倭寇と南蠻……王直同乗の葡船種子島に漂著す

印度副王より豊臣秀吉に送つた書狀……………一七六

豊公雄圖の最高調……南國に對する偉圖……使節ブレニヤーニ……その史料……使節捧呈の書翰……伊太利語の重譯文……ルイス・フロイスの經歷……南蠻寺興廢記のケリコリ・ヤライス……妙法院文書の現形と原狀……書狀の文面と周圍……書狀の文句……年次の相違……使節の目的……年少の遣歐使節……豊公の復書……兌長老起草の復書案……使節の居館……アラビヤ馬の獻上……行列の見物……聚樂城謁見の次第……英雄得意の光景……南歐より歸朝した使節……豊公歐洲談を聞く

活字印刷術の傳來……………一七九

本木昌造の活版術……米國印刷術の影響……印刷術と耶蘇教新舊兩派……洋書調

所の活字方……大島圭介の活字製造……和蘭活字の模倣……漂流民と活版……青木昆陽と西洋印書……遠西奇器圖説……耶蘇舊教徒の貢獻……耶教渡來初期の版本……西洋活字印刷機の舶載……媽港學林版の歐洲紀行……國字本の歐洲紀行……日本耶蘇會刊行本……印刷機輸入の始末……羅馬字板本……國字板本……本邦の活字本と耶宗活字本との比較……落葉集……懺悔書……耶教要旨……善導書……耶教要旨別本……太平記拔書……吉利支丹版の精巧……文祿征韓役と朝鮮活版術の傳來……慶長活字本の跋文……浮田秀家と朝鮮本……五山名僧の從軍……勅版活字本の由來……勅版古文孝經成る……豐臣秀次の文事……小瀬甫庵出版の大成論……活版の盛行……朝鮮系活版と南蠻系活版……初期の片假名印本……平假名印本……初期平假名印本の年代……平假名活字本……本邦平假名活字本と吉利支丹版の交渉……角倉素庵の印刷業

天草吉利支丹版の平家物語拔書及び其編者について

……………二二七

本書紹介の發端……サトウ氏の解説……本書の外形と體裁……國語資料及び文學史料としての價值……標題……標紙の繪……開版の場所と年次……梓行者の總序……編者の緒言……原語の音釋及び翻譯……平家物語の作者を支惠法師となす説……平家物語と琵琶法師……譬者と語部……譬者ダミアン……人名地名等の解……正誤表……難語解……流布本と口譯本との比較……篇目の概要……對話式……本文の一節……天草の耶教と當時西教の形勢……天草の耶蘇會學校……小西行長と耶教……加津佐の學林……ブリニャーニの來朝と遣歐使節の歸著……本邦活字版の權輿と西洋印刷術の傳來……ロドリゲス……語學書及び宗教書の出版……遣歐使節紀行の印刷……吉利支丹版の現存書……刊行年次と出版地……天草版の羅甸文典と羅葡對譯辭典……天草學校の破壊……長崎出版の日本辭書と日本文典……ロドリゲスの功績……此書の編者フロビアン……破提字子……本多上野介に教義書を獻す……村山東安……フロビアンの轉宗……フロビアン出家の年次……フロビアンに關する本邦の史料……吉利支丹物語……南蠻寺興廢記……吉利支丹濫觴記……變宗制禁錄……切支丹宗門來朝實記……伴天連記……フロビアンは

目次

伴天連中の有力者……フワビアンフワビアンの西史に傳へられざる理由……フワビアンフワビアンの經歷……邦書西譯上に於けるフワビアンフワビアンの功績

南蠻本平家物語抄

二八四

吉利支丹版四種

三二二

一 金句集

三三二

二 勸善抄

三三六

譯者と出版地……横文入りの例……卷末の字彙

三 落葉集

三三四

現存本の所在……歐西書目と本書の存在……サトウ氏の解題……刊行地と編者……その序文……本書の組織と其特色……落葉集本篇……半濁音を用ゐしこと……色

葉字集……官名並に國名……小玉篇……編者の新案……本書印刷の精巧

四 懺悔錄

三三七

南蠻寺内の懺悔の間……内容の一例……第一戒を犯せる懺悔……第二戒を犯せる

懺悔……第四戒を犯せる懺悔……本書の價值……その體裁……編者の閱歷

乾坤辨説の原述者澤野忠庵

三五〇

本邦布教の末期に其名を留めし三人の伴天連……新井白石と岡本三右衛門……忠

庵の本名と生國……西史に傳へられし異名……忠庵の來朝……逮捕の年次……忠

庵の轉宗……日本天河司罰天連……江戸忠庵……顯偽錄……雪窓宗崔……岡本三

右衛門の破邪書……顯偽錄は類書中の隨一……譯官としての忠庵……三右衛門等

一行と南部漂着蘭人との訊問……三右衛門等の幽囚……乾坤辨説中の本説……布

教師と天文学……崎陽の談天家……向井元升の辨説……乾坤辨説の別本……松吟

……二儀畧説……天文学上の蘭説……忠庵の南蠻醫術と其門弟……忠庵の轉宗に

對する非難……忠庵の晩年

メキシコ舊版の日本文典

三七〇

本書紹介の發端……フンホルトの本書に對する批評……ロドリゲズの文典との

比較……オヤングレーレンの閱歷……彼の日本語學の智識……ネブリハの文典……

目次

目次

オ氏文典の價值……その體裁……本書編述の動機……タガール語學書抄……内容の一斑

古銅版畫と辻蘭室

三八一

陸戰圖の譯文……海戰圖の譯文……蘭室の畧歴……文苑の辻氏一族……當時京畿蘭學界の狀況……廣川獬……小野蘭山……蘭室は京地蘭學者の魁……稻村三伯(海上隨鷗)……藤林普山……小森桃塢……野呂天然……蘭例節用集……蘭語八牋……諸侯中の蘭癖家……蘭室の露西亞語學

テオフィロ・ブラガと葡萄牙文學

三九六

文學史家としてのブラガ……その著作……民謡研究家としてのブラガ……詩人としてのブラガ……コインブラ詩派……コントとブラガ……カモエンスの崇拜家……イベリヤの今事とスカンデナヴィヤの現代

目次終

口繪目次

一 南洋タヒーチの野趣 (ボール・ゴーガン筆)

二 南蠻船の入津 (屏風畫)

三 古渡のゴブラン織

南洋タヒチナの野趣

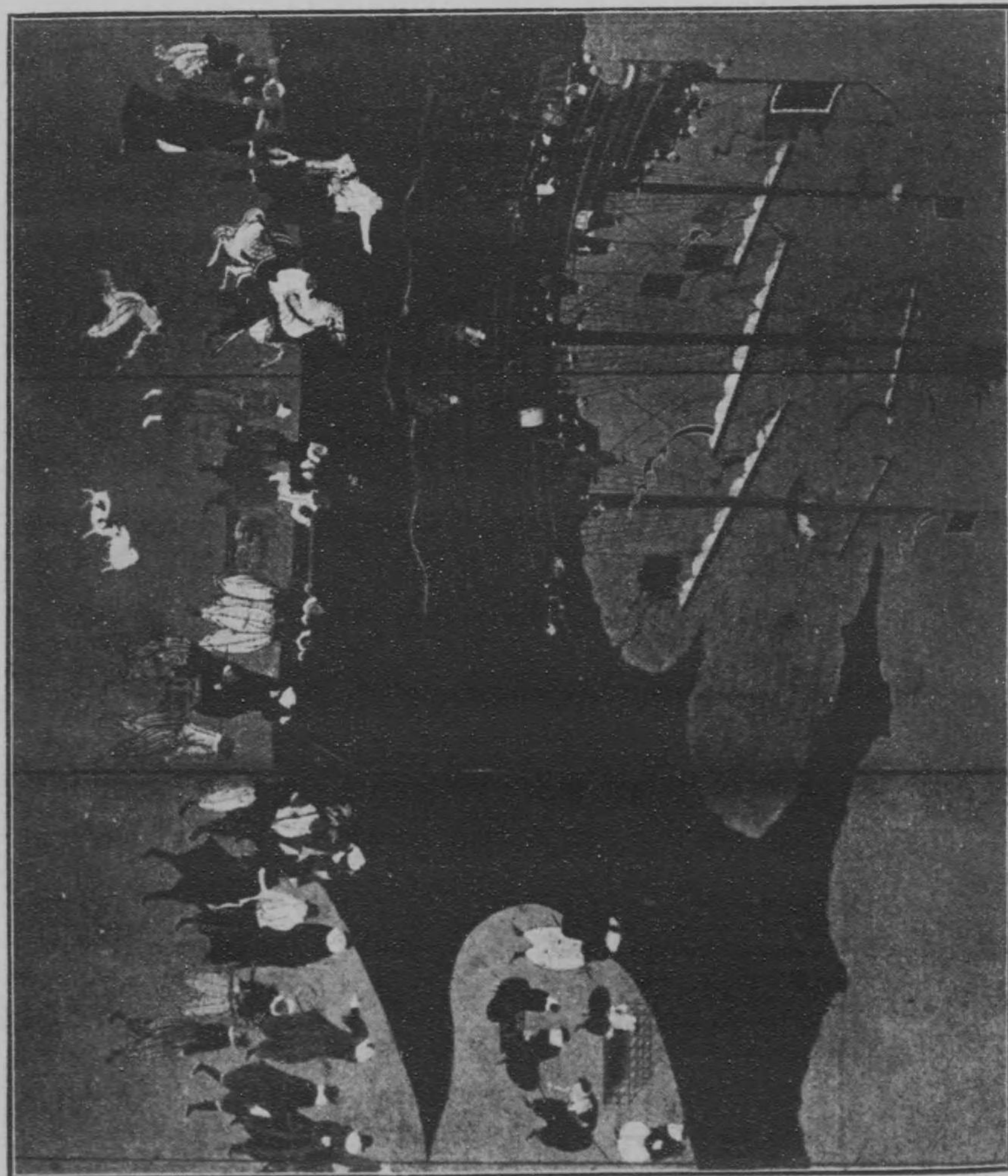
ホルル・ゴングン筆



著者 藤村 野矢

悪魔の心と少年

南蠻船の入津（屏風畫）



南盤江の人事 (采風畫)

古
渡
の
ゴ
ブ
ラ
ン
織



古
遊
心
を
い
く
人
の
癖

南蠻記

文學博士 新村 出 著

南風 (極東流竄の詩人カモエンスを憶ふ)

一 黄金が島

東方に金の島、銀の島があるとは古代から遠西人が懐いてゐた妄想である。プリニウスやプトレマイオスに至つては、黄金が島は、或は印度河以東にあるといひ、或は後印度にあるといひ、或はマラッカ半島附近にあるといつた。此御伽話にでもありさうな島は、中世を経て近世の初、所謂発見時代に入つて愈々探検家の慾念を高め、航海者の好奇心を助けた。

南風



南風

所へ、マルコ・ポーロの紀行で、日本には宮殿が黄金を以て屋根を葺き、鋪道を畳み、床も窓も金づくめであるといふ話が傳つて居た。此様な話は、異域より歸來した旅行家の常に好んで吹聴する法螺であつて其儘眞面目に取上ぐべき筋ではないけれども、又何等の根據のない作り話として全く排斥すべきものではなからう。宋代に於る彼我商人の來往、求法僧入宋の頻繁から推して、如是金殿の風聞が既に閩浙の要津に達して居つて、彼のエニス商人の息子が杭州なり刺桐（泉州）なりに於て之を耳にし、歸國後更に之を大袈裟に傳へたものとは見られまいか。其風聞の金殿なるものが「上下四壁内殿皆金色也」とある金色堂などを指すや否や、又金色堂が屋蓋にも貼金を施してあつたといふ古傳と推測とが當つてをるや否やは直に定められる問題ではないが、兎も角あの風聞に元と何等か事實の分子が存したとすれば、先づ何人にも考及ぶべき建物は光

南風

堂であらう。室町の頃の金閣銀閣はいふに及ばず、安土時代の公方邸の天井や柱や階段は金を以て包んであつたとは例の南蠻僧の報告にも見え其邸址から貼金瓦が出たのは近年の事である。桃山御殿の廢墟から往年來屢、貼金屋瓦が發掘されたことは誰も知つてゐる。文獻徴すべからずとせば、鋤や鍬を力に氣永に機を待てば、鎌倉や藤原の盛時の建築にも金瓦を用ゐた例を發見するのであらうし、從て金殿の風聞も愈々無稽ではなくなり、史興益、加はり來るであらう。茲に比較に引くのは、大き過ぎるが、太古希臘の南島クレータが海國として水上權を專にしてゐた時分、島の都クノツスの内裏に名高い迷宮があつて、其奥で希臘の勇士テゾイスが猛牛を退治したといふ武勇譚は、唯の昔話とのみ人口に膾炙して居たが、近年イーワンス氏の發掘に由て丁度其迷宮に相當すべき構への宮殿が現はれ、又猛牛退治を想像せしめる様な畫圖類も出て來て、

彼の武勇譚は全く無稽な作り話ではなくて、幾分か事實に基いた物語であらうと推察するに至つた。又トロヤ城址の發掘者として有名な故シユリーマンは別にエーギナ灣に瀕するチリンスの宮城を掘起して、古典學者をして、其宏大な城壁や宮中の結構に、宛もオヂツソイス物語に見えたアルキヌース王の宮居の面影を懐しめた。デモドコスが弾く琵琶にトロヤ軍記の一曲を聴いて、當年の旗頭であつたオヂツソイスが今は敵を亡ぼし舊里に歸る途すがら、波に漂ひ舟に浮きといふ有様の傷しさに、潸々と泣たといふ百磯城の大宮處は此間ぞと回想する者もある。掘出された古爐は白き腕の王妃が近う、玉座を占め給へりとある其爐だらうと懐古する空想家もある。斯の如く近來の考古家が鋤の端の掘出物は詩人の想像から作上げた架空談に止まると信せられた物語、俚俗の口碑に傳つた根無草から花が咲いたと考へられた昔話をば、段々事實化しようとする。

日本にある金殿の話も、考古家の發見に由つて相當の根據を有つやうにならぬとも限らぬ。コロンブスの探検心を刺激したトスカネルリの書簡中にも、右の金殿の話が引いてある。されば彼のジェノワ出の探検家が黄金花咲くと思つて日本國を目指して渡海したとは謂れぬまでも、冥々の裡に之を引寄せたのは、或は五月雨に降殘したる光堂の金色の餘光かも知れぬ。更に別の推定を試みれば、あのエニス商行の息子は遠西に傳つた金島の昔話を日東に結付けて金殿の話を組立てたとも考へられる。久しく金島の所在地附近だと假定された馬來半島の一角が、十六世紀の初、一たび佛郎機人の占有に歸したかと思ふと、スマタラ島の南に金島があるといふので幾度か船を出しては、覆没の難に罹つたこともある。或船の報告によると、實際其島を發見して黄金を満載して歸航する寶船を見たといふ。南蠻の七福人でも乗つて居さうなことである。所が初夢

の類であつたと見えて、金の島は見當らない。段々南へ南へと探してゆく。今度は少し西だ、そら東だといふ中に百年ばかり経つ。遂に黄金が島は日本の東へ移つて来た。斯て南海東海の智識は増したが、とうとう島は見付からず仕舞ひ、笑話にもなりさうで、又教訓にも引かれさうな話である。然しながら、當代慶長頃の日本の金銀の産出額は夥しいもので、海外への流出も亦驚くべき程であつた。南蠻貿易極盛の一頃、天川船は年々我國より一千万圓にも上る黄金を積んでいつたといふ。さればケンベルは形容して、輸出がもう二十五年も續いたら、天川はソロモンの榮華の極み時分にシエルサレムの府庫に充ちた金銀の富と同等に達したであらうと評した位である。西班牙人が日本を銀の島と呼んだことは、フランシスコ・シヤギエル上人の書簡にも見えるが、我國を黄金が島と名付たことは聞かぬ。然し、遠西人の昔話の金島は即ち日本だと誇稱

しても恥かしくない富を有つてゐたのである。

二 佛郎機人の渡來

ライン江底の黄金を求め得たアルペリツヒの如く、葡萄牙人は希臘古傳から出た金島を遂に東海の扶桑に見出した観がある。然し、葡人は此黄金から未だ環を鍛へ終らない間に、愛の教、吉利支丹が東漸した爲め、此黄金を手放して權力を失つて仕舞つた。長崎や天草は手に入れそなたが、纔に亞媽港だけはルスの後裔たる葡人が東洋に於る孤城となつて居る。黄金島に程近いマラツカを領有した後數年、この所謂佛郎機人の船が南海に現はれて、媽港の西南に當る上川島を根據として百蠻貿易の要津廣州の府に互市を求めたのは、明武宗正徳十二年、西紀一五一七年の事である。獨逸でルーテルが新教開基の年、明では王陽明が寧王

支那に渡
つた南蠻
人

の亂を平げた一二年前に當る。葡萄牙の使臣は既に方物を貢して入京を許された所、正徳十四年偶、帝の南狩に遭ひ、翌年帝に従ひて、南京から北京に入り、會同館に置かれ、前途好望であつたのに、間もなく武宗の崩御となつたのが一轉機で、使者は獄に下される、修交は絶たれる、爾來凡三十年、廣上川島に、閩漳州月に、浙寧波に、屢互市場を得て、而も續いて根據地とすることが出来ず、攘夷鎖港の厄に遭つたけれども、撓まず屈せず終に澳門に立脚地を確立するに至つたのである。其間天文十二年西紀一五四三八月葡國の商船が種子島に來たり、同十八年嘉靖二八シヤ井エル上人が日域に渡來して西教弘布の端緒を開いたりして、日東先づ西方の文明の光に浴し始めた。既に扶桑より去つた上人が中華の民を濟度しようとして、上川島に着いて、瘴癘の爲に命を殞したのは一五五二嘉靖二三年の事で、亞媽港を葡人が領有したのは、其前後、寧ろ稍後年に

屬するらしい。尤も葡人が此處に據り又は貿易を始めたのは尙古からう。又占有の由來や手段や年代に就ては、清朝の史籍地誌兵志等にも異説が區々であり、西人の所論も一定せず、且中國の所傳と泰西の考證と齟齬してゐるが、姑く諸説を參酌して、嘉靖三十年代、西紀一五五〇年代の初、或は中頃を以て葡人の媽港開市場確立又は其占據の時期と假定しておく。即ち倭寇が閩を中心として浙廣に互つて最も猖獗を極めた頃である。其頃江南一帶の沿海は、俗諺に所謂「北虜南倭」の其上に、更に蕃舶との釁を加へ、海上には佛狼機の響を聞いて、濱邊には日本刀の切味を知る有様であつた。西力東漸の事蹟は倭寇の歴史と相俟つて史興一段と深い。さて此と媽港との關係はどうか。

三 亞媽港とナポリ

南風

亞媽港はナボリの面影があるといふ。成程其形勢或は似た所があるかも知れぬ。然し規模の大小は別として、一たび彼の南伊太利の名港に遊んで、あの長汀曲浦に打出でて見れば、あの山の頂より立登る煙が清らかな空に消える、陋巷に入つて肩摩穀擊の間を通れば、南國の風殊に著しくて、物言ひの喧囂や身振りの活潑が耳目を衝く、夕暮山巔より火の燃えるのが見える時分に公園に逍遙すれば、即興詩人か講談師か群衆を引附けて高聲に謠ふ、朝風に大船が碇を下せば、琵琶を弾く男が娘に踊らせながら鄭聲に何々節かを合唱して小舟が流してくる、凡て此等土俗の色彩から得た感興を覺束なくも今心裡に再現して、まだ見ぬ澳門の上に投じ、其面影を見出さうと勉めても詮がない。若し詩趣の豊富と史興の横溢とを除けば、此廣南の一新港は小ナボリと呼んでも合點される位な似通ふ趣を具へてをる。けれども、澳門の背後には所謂廣東が控へてゐる

南風

て一層南伊の古港に比べらるべき格に位するのを忘れてはならぬ。更に我朦朧たる史眼に映する儘に閩の泉州、浙の杭州明州寧波をエネチャやジエノワに對して見たくなるのであるが、兎も角この由緒の深い嶺南の要港たる廣府を風土や民俗や人氣の側から、交通史や文化史の上から、ナボリに連想するのは不倫であらうか。廣府は上古より夙に遠西の商船、海南の蕃船を以て港を賑はせ、北は中原、南は海洋の物産集散の中心として珍禽異獸の渡來や香木奇花の移植はいふに及ばず、諸蕃の混和、殊俗の交錯より異域の文化の流入に至るまで史上の興味は一通りでない。天竺の教法も波斯大食の文明も此津を通り、早い話が、達磨が南天より渡來にも、義淨が南海の寄歸にも、廣州を経たし、大食人の創めた回教の寺院懷聖寺も廣府にあれば、入竺求法の高僧が波斯船に便乗して入津した例もあるといふ様に摩訶支那の南門であつた時代がある。澳門に

至ては、宛然小廣州の觀があつて、諸蕃の雜居といひ、歐商の開市といひ、西教の傳來といひ、殊に明末清初にかけて、天正文祿より慶長元和に互つて、歐洲文華を兩國に取次ぐ問屋であつたこと猶唐宋時代の廣府の如くであつた。廣州城下に泊した海船が倭寇を避けて前明正徳年中に西の方高州府の電白縣に遷された後、嘉靖に至つて東に復して一たび香山の浪白灣を以て蕃舶の市場に充て、再轉して遂に亞媽港がルシタニヤ人の占居となつた始末である。

嶺南の地は荆楚よりも更に南に偏在し、中原には隔り、燕趙とは別域たること獨伊の相違に髣髴としてをる。支那の風土文物に南北の別を立てる學者があるけれども、此南越は、梅早く落つるといふ彼の大庾嶺でも踰えなければ、屈原の郷に進むことも出来ない程の更に遠い南である。ワイマルの詩人がナポリに旅寢した折の日記に「ナポリの民は樂園に占

ナポリと

居するが如く信じて居る、北の國びとどもの上を、さも傷はしう考へ、不斷の雪、木造の家、無智は甚いが、金は澤山 *Sempre neve, case di legno, gran ignoranza, ma danari assai.* と、斯様に吾等の有様に對して想像して居る」と見えるが如く、南溟に濱する廣東の民も北地を此様に憫んでをるだらうか。ゲーテが或日灣頭の丘上に杖を曳いて、俯仰山海の好景に見惚れて居ると、村童が一人何やら叫びながら近寄つて來た、一寸の間身動きもせず居たかと思ふと、臆て詩客の背を軽く打つて、右手を延ばして指さしながら斯う云つた、「をぢさん、御免よ、こりやあわしの郷だよ」*Signor, perdonate! questa è la mia patria!* 之を聞いたゲーテは後に此事を紀行に書いて「憫むべき北人の我眼には涙が催された」と擲筆した。「ナポリを見てから死ね」*Vedi Napoli e poi muori!* の諺の如く、市の形勝には流石の大詩人も「言語に絶す」とて、筆を收めた程で、

南風

市民は我を忘れて酔うたやうに、宛も、「何ゾスオのもう二つや三つ近處に聳えて居たつても構ふもんか」と嘯いてをる。「イフキゲニー」や「タツソー」の名籍も山水明媚な此邊りで作者の結構に出た所が多いことは、其女友に宛てた玉章の一節でも知られる。斯くの如き勝地と、赤道に二十度も近く、瘴癘の氣に富むといふ南越の府とを同視してはならぬが、南土の人が故國に安じて北人を見ることが、やはり斯様な風がありはせぬか。又古來中國の詞人で嶺南の風光に吟咏した者は、決して少くはあるまい。我が臚ろげな記憶に浮ぶ潮州の謫客の如きは元來彼處に佛骨を誹り、此處に鱷魚を祭る様な北人の氣魄其儘であつて、到底南風の餘韻を傳へる文人ではあるまいが、橄欖の影茉莉の香獨り烈しいあたりで郷土を歌つた名作は世に聞えぬのか。

四 媽港の詩仙洞—倭寇と詩人

かの所謂小ナポリを飾る爲に天は萬里の遠西より詩人を下した。葡萄牙の國民詩人ルイス・デ・カモエンス即ち是である。斯人あつて亞媽港は始めて洋船の交易場から不朽の詩境たる地位に上り、耶穌宗や西洋學の東漸した歴史の上に殘るばかりでなく、世界文學史中の一名所となつた。媽港を北へ支那領の香山城南と連絡させる蓮花莖と云つて廣さ僅に五六丈の、支那里で十里程の沙隄がある。中間に關閘を据ゑて華夷の境界とした。此地峽のこちら、沙隄の盡きる邊に蓮花山といふ危険な小山が聳え、其北麓には浪に浮んで來たと傳ふる二三の奇石が横はる。嶺を攀登つて南を遙に眺むれば、海天無際、鳥嶼青を浮べ、烟霧の中には澳夷の居る白屋數十百間が見える、大慈大悲の三巴寺は、同じ名を負ふ石火矢臺の

南風

南風

蔭に隠れて分らぬ。西には青洲山といふ幽勝な小島を見下す、桄榔檳榔
 の中に耶宗の寺樓が屹立し蕃僧が樓榭を構へ、卉果を雜植して澳夷遊眺
 の地とした。東には九星洲山と云小嶼が浮ぶ。九峰に分れて、巖穴が多
 く、奇葩異草に富み天塘水と呼ぶ甘泉がある。カブリの奇勝は無いが、
 澳東の海中、星散碁布する島々に白波の打碎ける絶景は亦此蓮花山上に
 賞せられる。山下の稍南に望厦村といふ村落がある。茅屋三々五々、菜
 園があつて一二の徑が之を横切る。村の前にある二つの石が烟月迷離の
 際に望むと男女が肩を比して立つてゐる様に見える。此石は、今予が多
 く敘景の材を採つて澳門紀略によれば、夷人が夫婦喧嘩の仲直しに參詣
 するさうで、名を公婆石といふ。緑の小丘、蒼鬱たる樹木、それらの邊
 にある洞穴の裡に、カモエンスは叙事詩の大作『ルシアダス』の初の六篇
 を草したと言傳へられる、其詩仙洞は此公婆石の附近であるらしい。居

カモエンスの詩仙洞

倭寇と葡人

ながらにして名所は委しく知れぬから仕方がない。

カモエンスが既に臥亞より謫せられて西紀一五五六三五年纜を解い
 て支那に向ひ澳南に來た時、吾々に最も興味の深い話がある。嘉靖の其
 頃は倭寇が江以南に猖獗を極めた時代で、汪直が右に海倭を導き、左に
 葡夷と結んで、横行した時分である。先づ浙江の海寇が苦戦の後辛うじ
 て驅逐された結果、閩廣に八幡船が北風に乗じて烈しく推寄せる様にな
 ったのは、同三十四年のこと、以來數年間、福興泉漳より、嶺南の沿海
 潮廣の間へかけて、紛々として倭警が聞える有様であつた。是より先、
 正徳年間中葡船が提督アンドラーデの指揮に由て、初めて上川島に來た
 時にも海寇に對する備を見たといふし、又何時よりの事か、澳門にも備
 倭行署といふ海防の局が置かれた。明の史にも、佛郎機人が「後又乘倭
 寇之間、縱横海上、占踞澳門」とあつて、倭寇と葡人及媽港と相涉ること

南風

を證する。尤も倭寇の徒が葡人に滿刺加及閩浙等に於て出遭つたのは一層前のことだといふ説もある。斯る倭寇騒ぎの最中に、カモエンスは嶺南の一島嶼に着いた、聖フランシスコが上川島に其肉體を埋めた六三九年同島にて葡漢兩文にのちすうねん後數年にして發見時代の叙事詩人は浪白濱に着いた。

倭寇とカモエンス

詩人の傳を書いたジエロメニヤ子爵の推察に由ると、一五五七嘉靖三十五年六隻の船隊が浪白に泊した事實から考へて、詩人も其中に伍して倭寇討伐に加つたらうと云ふ。モンタルト・デ・ジエススの媽港史には、媽港の記録に由りて、此際葡人は海寇を襲撃して大に之を破り、媽港より之を驅逐した、賊の生存者は後に稱してイリヤ・デ・ラドロエス(海賊島)と云ふ島に退いたとある。其處で此戰捷の功を以て葡人は同年媽港を得た。即ち皇帝の勅許は、漢文で同港の議事院に刻してあるといふ。勅許の事は疑はしいが、澳門獲得の由來は蓋し事實であらう。兎も角、既に

古文左武の閱歷を有する此隻眼詩人が倭寇退治の役に參加したといふのは、吾等にとつて何たる感興の深いことだらう。但し『ルシアダス』の中には、其事を叙してない。

五 カモエンスの生涯

遠くはホメーロスやギリウスに蹤を繼ぎ、近くはアリオストロの流を汲み、當代のタツツーとも涉り、後代のミルトンに接する敘事詩人カモエンスの閱歷ほど騒人傳中多情多恨で軼軻不遇で異彩を放つものは類稀である。其傳奇的な生涯を材料に資つて、既に幾多の詩や小説や戯曲が諸國で作られた。ルードキツヒ・チークの小説『詩人の死』の如きも其一である。其時代の國民を歌ひ、傍ら東洋諸國殊に支那や日本の事をも諷詠の料に供した此詩人の略歷を今茲に讀者に傳へるのも無用ではあるまい。

多感なるカモエンス

南風

ルイズ・デ・カモエンス葡名カモガリサボン或はコインブラで門地卑しからぬ家に生れたのは、丁度印度航海者として隠なきヴスコ・ダ・ガマの死んだ一五二五年頃で、而も此俊傑とは母方の親戚に當る間柄であり、且つ詩人の祖父はガマの最初の東航の時、随つて行つた経歴もある。剩さへ父は臥亞で難破して死んだ船長である。ヴスコ自身は印度に命を終り、其子供達も多く東洋の事に盡瘁したのであるが、其三子某は彼の「東方の使徒」が中華に向ふ頃、此「時代の詩人の王」が南天に住する時、滿刺加に職を奉じて居た。ルシタニヤ人が不拔の元氣を以て東方の探検と経略とに従事し、到る所葡寇をしつゝ、支那に達し、根據の港を得ようとしてゐた最中に育つたルイズは、「千艘や萬艘」と福の神の如く東の國から寶物を船載する帆掛船を見掛けたらうし、桃太郎が征伐した鬼が島の様な御伽話を實歴として聞かせられたに違ひない。バルロスの『亞

詩人の戀

細亞』の如き大著が出る二五五前に、既に幾多の紀行類が現はれて居たと考へられるから、之を讀んでルイズは感奮したこともあらう、憧憬したこともあらう。又一方には、文藝復興期に當つて、叔父が初度の總長になつた革新後のコインブラ大學に入つて、ルイズは夙に學藝を修め、秀才の聞えが高かつた。其間既に金髮の一少女に清い熱い愛を捧げて、詞はベトラルカぶりの、心はプラトーンまがひの情詩の數數を詠んだ。十八歳で業を卒つて首都に歸り、ゆかりを以て宮廷に出入し、詩才を發揮するに至つたが、其の強い我と鋭い舌とは、さなきだに嫉まれがちの天才に禍根となつた。禁中の政客詩人才媛と交はつて、宮廷の花と持映されてゐた所に、春の祭に或寺で、ふと見初めたのが縁となつて、宮女カテリナ・デ・アルタイデーに懸想して、其から數多くの戀歌も出來、其爲遂に多恨の生涯を送るに至つたのは、在來りの筋である。傳ふる所に

南風

由れば、才人は思餘りて此の王妃の内侍カテリーナ―歌の中ではナテルシヤといふに當て、密かに歌を贈つたのが露はれて、道ならぬ儀とて宮中に出入を差止められたともいふし、或は何か鞆當筋があつたとも云ふ。兎も角カモエンスは既に放たれてテーシユアの江畔に行吟する身と成つたが、自ら抑へて泪として南土に徂き、阿弗利加のモーア征伐に加つた。レバントの海戦に負傷して跛となつたり、北阿の海賊に擒となつたりしたセルヴンデスや、アルマダに従軍したローベ・デ・エガと同じ運命に遭遇したのである。不幸にも水戦で右眼の明を失ひ、古今の敘事詩人ミルトンや、の難を半ば身に負うて二年の辛苦を嘗めた後、歸國したことはしたけれど、其武勇を賞せられるでもなく、其文名を傳へられるでもなく、ましてや戀路の關を据ゑられて傷懷遣る方がなかつた。所へ或祭の日に國王の鹵簿に扈從した主馬の者と自分の仲間とが喧嘩したの

を仲裁したのが過ちの素で、隻眼の詩人は捕へられて入牢申渡され、後に赦されて印度へ配流される身の上になつた。

一五五三年春三月二十六日不遇の騷人は瑾を懷き瑜を握り、金砂敷けるテーシユアの河口を、夕暮れに船出して、彼のスキピオの名句『不報之故土兮、不可以埋我骨』*Ingrata patria, non possidebis ossa mea* を吟じつゝ、印度に向つた。竟畢其敘事詩中の英雄や小英雄の跡を履んだのである。世既莫吾知兮、人心不可謂兮、懷情抱質兮、獨無匹兮の感を以て東に下つたカモエンスは、臥亞に着くと直に、隣國との戦役に出征する、年を越えて又亞刺比亞蕃夷の遠征に遣られるといふ様に、銃劍を手にせざるを得なかつた。臥亞總督の饗宴に演ずる喜曲を作つた様な風流韻事もあり、詩人は別に閑日月あつたが、獨清獨醒であるだけに、持前の鋭鋒を顯はして、植民地に於る上下風俗の頹廢を諷刺した爲に、臥亞

から追放されて再び竄流の身となつた。是迄も貧に處し不幸に堪へ悶々の中にも忘れ兼ねるは故土と佳人とであつたのに、今は更に不在者や死亡者の財産管理人とでもいふ様な役目を宛がはれて、澳門に謫せられ或はマラツカに流離らへ、或はモルツカに漂ひ、寄邊なき身と成果ては寧ろ南海の魚腹に葬られて、魂はビレネー山南に歸れよとも思つたらう。斯くの如き流沈の末、カモエンスは南風に送られて澳門に着いたのである。着く時には干戈を手にして倭寇の討伐に伍したらしいが、一五五八嘉靖三十七年より同六〇年迄配所に在つて、大夫でもない刺史でもない卑しい職務を執る暇には、抑心自強、陶々たる猛夏の熱をよそにして、草木莽々たる處にかの巖穴の幽墨を愛して、茲に不朽の名作を稿した。海づらよりは少しひきいりて山かげにかたそへて、大きやかなるいはほのたてるをたよりにて「流離の詩人が草した敘事詩と、湖水に浮ぶ明月の

影を見て石山の寺で書いたと語り継がる、閨秀の物語とは、兩極の對比をなすものとはいへ、構成の境に於ては共に一大詩たるの感がある。此隻眼の新島守は、爪哇生れの忠僕アントニオに侍かれて、廣南の謫所に三年あまりの常夏を送り「浪たゞこゝもとに立くる心地して」夢圓かならぬ夜半も多かつたが、讒に遇つて職を罷められて臥亞に召還されることになつた。吾等が遂に日東に迎へる光榮を有することが出来なかつた此騷人は、西航の途、其船が交趾沖、湄公河口で難破して、纔に『ルシアダス』の稿本を身に添へて、主従共に助かることを得たのは、不運中の好運であつた。若し真に『明月不歸沈碧海、白雲愁色滿蒼梧』の嘆を繰返さねばならなかつたらば、歐南の李白たるものは、矢張タツソーに非んばエガであつたに違ひなからう。印度に達して、初めて得たのは愛人ナテルシャの訃音、受けたのは縲

南 風

繼の辱であつた。幽囚に次ぐに幽囚を以てし、後故國に歸る路すがら阿弗利加の東岸ソフワラで貧窶の裡に數年を過ごし、一五七〇年四月『私が女子よ、南風吹かにや、わしは一生戻れまい、私が女子よ、南風讚めよ、わしが土産は金の帯、かはい南風もつと吹け、ほッほ、えい』といふ勇ましい船歌を聞いて、リサボンに歸り、流離十六年の後、初めてテ―シユー江畔の金砂を踏んだ。

歸ると都は黒疫の蔓延やら宗門改の嚴重やらで、異郷で想つた程の安慰も無かつたらうが、定心廣志、『ルシアダス』の公刊に従事し、先づ新王に獻り、官府と宗門との免許を兩ながら得て、出版したのが、歸國して二年餘後のことである。耶蘇會の學林に通ずる陋巷の端に、聖安院に接する家居にあつて、殊にやんごとなき邊りの保護を失つて後は、赤貧洗ふが如き有様で、忠僕の黒奴が夜なく路頭に袖乞をして主人の爲に

食料を得たといふ話さへ残つてゐる。

一五八〇年、又もや黒疫の流行つた歳の六月十日、カモエンスは終に命を終つた。棺にも納められず、而も又經帷子をも着せられずに、人知れず葬られたと聞くに至つては、誰か此天才の爲に泣かずに居られようぞ。昔から詩人の薄倖は珍らしい話ではない。然し此ルシタニヤの國民詩人ほど悲惨な運命に遭つた例は、實に稀有である。施藥院にあつて臨終の床の邊で今しも聖餐の禮を奉ずる僧に、其手澤の『ルシアダス』を形見に遺した。流竄の擧句に成つた苦心の作を、南海の波間に懐いた最愛の書を、終に手離して逝かねばならなかつた。其國の偉人と其國民の雄圖とを歌つて其國其國民に何等報いられることもなくて逝かねばならなかつた。

六 『ルシアダス』と百合若物語

南 風

南風

發見時代の葡萄牙は、ガマ、アルメーダ、アルブケルケの三傑を生んだ。同時に幾多の小ガマや、小アルメーダや、小アルブケルケを産した。積年の小發見に繼いで、阿弗利加の周航、印度沿岸の征服、滿刺加の占領といふ偉業を果した。國民感情が勃然として起るのは自然の勢だ。其處では等の俊傑を頌し、是等の壯圖を歌ひ、國民の氣魄を表白して、之を後昆に遺し、當代に傳へる爲に、ホメーロスやギリウスの如き敘事詩人を渴仰せねばならぬ。恰も好し、古典研究の風潮はイベリヤ半島の西にも及んで、希臘羅典の古詩は之を學ぶ者が多く、註疏を作る者も輩出し、十五世紀の末はや葡人の宏業を六脚韻の羅詩に詠じた作家もあつた位である。カモエンスの天才は家系や時勢の刺激からして、夙に國民敘事詩の製作を我が使命と自覺し、殊にコインブラ大學に在ては銳意イリアス、オヂツセーア、エーネイス等の研鑽を事とし、先づ羅典史詩を綴

南風

つても見、佳人への詩中には自ら「新ギリウス」とさへ名乗つた。然し、其詩才は優に國語を以て史詩を作る力のあることを發揮し、國詩をば羅詩と同位に引上げることを得た。俗語を敘事詩に用ゐて、之を魔いたから天下靡然として之に従ひ、文起三代之衰の場合の如く、カモエンスが起つて、始てルシタニヤの國語を以て書かれた國民詩は百世の師を得、天下の法を作つたわけである。斯様にして、詩壇の期待空しからず、遂に葡國のホメーロス、葡國のギリウスは出現した。茲には其敘事詩『ルシアダス』の結構や詩形や着想を詳説する暇はない。只詩體と修辭はギリウスに則り、韻律はアリオストーに倣つたこと、獨創の構想を以て國土國民を謳ひ、殊に全國民を詩中の勇士としたのは破天荒であること、事實や歴史を細説直寫しようと思掛けて、寧ろ人物の理想化や自然の美化を避けようと勉めた

南風

こと、然し無論古代の神話中の神々は叙事中に取り納れたことなどを教へ擧げて止まうと思ふ。却て枝葉に渉るけれど、題名及其名義に關して一言しておきたいことがある。

敘事詩の原名は『オス・ルシアダス』といふ。ルシアダス男性とは別に複数ルシタノスとも云得べく、ルシタニヤ人、即葡萄牙人を指すのである。古傳中の葡萄牙建國者即ち葡人の高祖をルスス或はリンスといひ、之に因つて國をリサ、リシアと呼んだので、ルシアダスはリシア人又はルスの子孫の義である。古への羅名のルシタニヤから葡人をルシタノスと稱したのは、近代の羅典學者の文章に始まり、一四八一年以來行はれてゐたが十六世紀の敘事詩人どもは寧ろ此學者じみた羅名を避けて、響きの好い雅名のルシアダエ又リシ、アゲエルシアデス又リシといふ形を用ゐてをつた、其をカモエンスが始て語尾を變へてルシアダスと爲て俗語に編入し

たのであるといふ。

所がエルシアダスといふ名が、一五七、八〇年代前後に行はれた御伽話の中に見える。即ちルスス、エリサが首都リスボア(リサボン)を拓き、後にウリスセス(オヂツソイス)が之を建てなほしたといふ建國傳説に基くらしい。ウリツセスが、イペリヤ半島へ渡つて來てリサボンの都を建てたといふ話を當代の荒唐な史傳から材料に採つて、法學者羅學者として聞えたベレイラ・デ・カストロは『リスボアの建立者ウリツセア』といふ敘事詩を書いた。出來たのは一六〇〇年慶長五年出版したのは一六三六年寛永十三年である。稍おくれて同代の史詩人で『ウリシツポ』といふ敘事詩一六四〇寛永十七を書いた者もある。此話は勿論無稽に違ないけれども、葡人の雄飛時代には文海に歡迎さるべき好題目であつて、當代あちこちに見當る幾多の敘事詩料の中では先づルシアダスに次いで世間受のするもので、

南風

果してカモエンスの反對家はベレイラの『ウリツセア』を推して『ルシアダス』以上の作であると云つた程である。又同じ材料を使つて誦讀戯曲に仕組んだ作者もある。フェルレイラ・デ・ヴスコンセルロスの『ウリシツポ』古く一五八七頃の版あり即天正十五年頃がそれだ。

されば、十六世紀の遅くも後半期には、國都の建立者たるウリツセスの物語は、人口に膾炙して居たらうし、古典講讀の餘波で、ホメーロスの原作の筋も當代の人心に觸れて廣く知れ互つてゐたらうから、彼是の因縁相輔けて、東洋へ渡つた船頭や商賈達は此物語に非常な興味を感じてゐたらうと思はれる。況んや彼等自身は皆オチツソイスであり、オチツソイスの船子どもで有たので、到る處同様の冒險をして、風が變つて御舟の陸地に着くべき様もなく、あやかしが付いて難儀をしたことも多くあり、海神が恨をなして、潮を蹶立て惡風を吹きかけ三叉の鋒を振上

げて慕ひ來ると、打物わざにて叶はなかつたことも屢々あつたらう、又港々で白拍子の様に名残を惜んで御逗留を勧めたカリブソもあつたらうから、オチツソイスの冒險譚が彼等の口から極東の港に傳はり、更に語り継ぎ、言ひ繼がるゝ様になりはしなかつたらうか。若し果して百合若傳説がオチツソイスの話から出たものとすれば、其傳つた路筋は以上の如くであつたこと、考へる。彼の葡萄牙のホメーロスが媽港から更に平戸へでも配流される様な事がなかつたのは、致方がないけれど、假に想像を逞しうすれば、日本人は媽港か滿刺加か、臥亞か、さもなければ「波濤の謫所」でカモエンスに會ふ機會があり得た筈であるから、萬一其口から古希臘の百合若の話聞いたならば、此上もない面白い話である。現に天文十七年西紀一五四八薩南の若者の彌次郎等が、滿刺加でシヤギエル上人に出遇つて、遂に此「東方の使徒」の爲に東道の主となつた事實があ

るではないか。況してやカモエンス自身は既に一箇のオヂツソイスである。予は今餘りに外れた横道から本題に復らなければならぬ、史的空想から段々史實の道へ戻つて來ねばならぬ。

七 叙事詩に描かれた支那と日本

『ルシアダス』の大部分が東洋、殊に静閑な天川で成つたことに就ては、有力な考證もある。初篇の或節は後年幽囚中又は船路に出來たといふ説も争はれまい。唯、天川の望厦村前の洞は、『禽獸の音なひなく、人跡絶え、樹木鬱蒼として晝猶暗陰、此に勝れる寂寞たる幽處焉くにか求め得べき』と其小曲第百八十一に自ら歌つた通り、作詩に適した静境であつた。『巖の狭間に籠り居て、埋れ果てぬる身にしあれば、涙と悲みとばか

彼に歌はれた詩仙洞

詩曲中の日本

りなる瀕死の命をおのがまゝに詫びてまし』と詠じた此洞巖は、昔の仙士が修行の遺蹟か、島夷の設けた神籠石か、唐宋時代の大食人の墳墓かと異説は多いけれど、『ルシアダス』に由て、初て典雅の境となつたのである。

何はともあれ『ルシアダス』中に我國の様子を如何に敘してあるかを見たいのが人情である。元來この叙事詩は一面に於て葡人の東方經略史、ガマの東征傳であるが、作者は第九段の首に至るまで、偉業宏圖と異域の情景とを敘し去り敘し來つた後、初めて一轉して萬綠叢中紅一點ともいふべき挿話を綴出した。東方の經營既に緒に就いて、葡人どもが、『各、えいはぬ喜びに胸を漲らせ』そよ吹く東風に帆を擧げて歸西の途中、海路の日和の待合せにか、但しは風の吹廻しでか、到着したのが、蓬萊の島である。愛の女王、ルシア族の氏神、エヌスが、勇將傑士の功

南風

南風

業に報い、船頭舟子の勞苦を慰めようとして、此島を蒼波の上に浮び上らせたのである。詩人は是に至つて、實録の中に虚誕を交へた。『新キルギリウス』は以下ホメーロスの筆致を學んで、イリアスに描かれたトロヤ落城の光景にも反照すべき此戀島の卷を添へた。此種の結構は古今の叙事詩人の用ゐた慣用手段であつて、其構想や叙景はチヨースーにも、アリオストーリーにも、タツソーにもミルトンにも趣が似通ふとして、其等との關係を考證した史家もあるが、カモエンスの女神島の描寫には獨特の妙味の存することは争はれぬ。而して古來名高いエヌスが島の卷の末の方第十に於て、日本や支那の事が而も神女の口に由て歌はれてゐる様に寫してあるのである。大名は猿樂や連歌に興を催し、士民は御伽草子に閑を消し、禪僧は似而非詩文を玩弄し、歌人は古今傳授を難有がった文學の衰世に宗祇も宗長も守武も宗鑑も既に亡く、時雨降る頃小蓑はしげな

る猿の眞似ばかりして、何等創作力がなかつた元龜天正の交に、纔に長頭丸が産聲を擧げた頃、歐南のホメーロスが神女の口を借りて、ほんの十數行ながらも、日域の事を敍したのは、日本人にとりては千部萬部の史類に載せられたのよりも寧ろ光榮とすべきであらう。

『女神はやをら銀のみ車に召して雪の翼の白鳥に曳かせ、軟風がたゝする青海波の上を蓬萊の島さして向はせらる。白鳩は環を畫きながら、紅糸を帯び給へる女神の周りをまはる。』ローエンダグリンの序曲を聽いてる様な氣がして、誦んでゆくと、何だか遠くの水天鬢の際から船歌が風の工合で聞える。『雪なす白鳥どもは、緑の濱邊にみ車を上岸し奉れば女王は花の汀を踏ませ給ふに褰げたまへる裳裾はゆるやかにみ手より落ちたり。雪の肌半ば露はれ、打笑み給へば薔薇匂ふ』といふ段になると青一髪の上に白帆が見える。エヌスは此から歡樂の郷を現じ、女護の島

南風

を産まうとして、愛童を召寄せると、象牙の弓と黄金の鏃を嵌めた矢を持つてクビドが出て来る。すると、勝誇つて故國に歸る葡國の勇士達の船が近寄る、案針が不意に島を見付ける。鎮守の女神が生みませる蓬萊の島である。此から、島の叙景があり、舟子と海女との交歡があつて、勇士達の功は稱へられ、勞は報いられ、前途の幸福、將來の洪運が豫言されるといふ筋で、遂にガマ達は嬌娥ともいふべき神女に導かれて、参差たる路を登つて、高山の巔から、國見をみると、芬氣の中に地球が明亮に見えるといふ段になる。神女は戦くプロスコに四方を指さし、其大功を頌し、併せて國人の雄圖を讚した後、恒河の注ぐベンガラ灣のあなたを見遣り、葡人將來の鎮東策を講じ、徐に『東のナイル』涓公を越えて極東の國々に話頭を轉じた。カモエンスが罪なくして流された配所よりの歸路、あはや葡人雄圖の頌詩を水泡に歸せんとしたのを、辛くも優し

勇士と神女との見

支那の讀

い涓公の濱邊に救ひ得た仕合せを、詩人は神女の豫言の唇から漏させて、私かに自分の抱負を示した。神女の話は愈々支那に入る。『彼處には占波の香れる長汀延び、此處には交趾の耕せる土地小高う、安南の入江より、美なる支那の故土起る、災天の下より堅凍の地まで、富強の帝國廣く横る』と説起して、次に大砲や指南鍼の發明の古いこと、萬里の長城の宏壯なことを擧げて『歐洲の天砲聲未だ響かざるに先ち、此土既に其雷轟を敵に注ぎ掛けたり、西土猶磁石の神奇を知らざるに方つて、此土夙に定北の針を有せり、埃及以て稜錐塔を誇るに足らず、高山深谷に涉りて長壁萬里に蜿蜒たり』と讚した。

斯くの如く吾々は先づ婉麗な歌劇の一幕を見て恍惚となつたかと思ふと、忽ち神代卷の中の一節を畫圖にして眼前に展開された様な心地がする。ニンフやガマは何媛、何の尊と名けたい感が起つて建國の雄圖が懐

ばれる。敷ます島の八十島は谷蝶の狭度る極み、鹽沫の留る限り見霽か
します四方の國は天の壁立つ極み、國の退立つ限り、青海原は棹柁干さ
ず、舟の舳の至り留る極み、大海に舟滿ちついで、遠き國は八十綱打
掛けて引寄するの概を茲に窺れる。倭神女は支那の濱邊は未來の事とて
話を轉じ、紫だちたる曙に、輝く海を彩る南の島々の上に移る前に大八
島國を歌つた。ガマを磨いて語るには、

日本を詠す

島つ國こそ好く見つべけれ、
天地の恵み豊に足らひ
花も果も千々に香れる。
見よや日本を、廣き地球の
北の面低う國土位す、
東の境を海原周らし。

偉なる哉ガマ、爾が勞の
結果は其土に燦然たらむ。
天の御法に異端の滓渣を
鑛鍊ること除きし棄てば
銀の擴皓々たらむ。

末の三行は、シヤヰエル上人が法を弘めて耶蘇宗が邦人を教化濟度す
るといふ事に照應する。よしやカモエンスが澳門に入る時、同舟の者と
共に倭寇を平げたといふ話が眞實でも、それは倭寇、これは又詩人の才
筆に日本の名は南鐐の如く其不朽の雄篇中に輝くのである。

澳門の詩仙洞には、カモエンスの半身銅像が立てある。其礎には『ル
シアダス』中の六節が三面に分けて刻してある。洞の邊りには、内外の
詞客の製作にかゝる銘を彫附けた石碑があつて、左から三つめにはタ

ツソ一の頰を勒した。ローベ・デ・ゴガの挽歌もあつたが、碑にはなつてゐない。澳門の史興、詩人の追憶は綿々として盡きない。タツソーやエガの如き詩人と觸れ、エネチヤの畫家と觸れた當代の日本人の上を、もう少し書いて見たい心地がする。然し南風は此で小止みとする。

(明治四十三年六月)

嶺南思出草

エネチアを發つてフイレンツエに向つたのは四月二十九日の午後であつた。

其日の朝、サンマルコ寺の仲見世で、例の記念と土産に、ゴンドラ形の枝折や、珊瑚樹や、繪葉書を買はうと、或店頭に立寄つた所が、古風な大形の船が、まだ船卸もせず海濱に横はつて居る側に、女が火炙に

サンマルコ寺の仲見世

ダンメンチオの新劇

遇つてる景の繪葉書を見付けた。熟視すると、昨日博物館で雛形を見た二十四挺艦の帆船と同じ形で、其陰には大勢手に手に得物か十字架らしい物を持つて、焚殺される女を見守つて居る所だ。はてなと下の方を見ると、ダンメンチオの『船』、鳳凰座にて、と、赤く刷つてある。店の女に尋ねると、今興行中であるといふ。買物もそこ〜にし、試に場が取れるか聞かせて見ようと、宿に歸つた。原作は未だ手にしなかつたが、此一月の十日頃、初興行の模様と筋書を其晩に羅馬から報じた長文の電報を翌朝の伯林の新聞で讀んで記憶して居るから、是非見物して歸りたいものだ、胸を轟かせて、ホテルの手代に頼むと、お生憎様と膠もない挨拶である。第一、世界を此土地に取つてはあり、殊に作者が顔を出すと云ふので、毎晩非常な人氣、どうしてジツパングの人などが席を買へるものかと云はぬばかりの始末に、未練は残るが、曲中で當市の象徴

嶺南思出草

になつて居る「全世界號」とバジリオラとを畫いた葉書をせめてもの好記念として、此詩趣に富み史興に豊かな水の都を去ることにした。

葡萄牙の房を取りそこなつた狐の様に、新曲の味を酸ばいとは思はなかつたが、まだ行く先々に面白いものが澤山あると自ら慰めて發途すると、程なく汽車はポー川の鐵橋を渡る。川邊の柳が霞んで故郷を思はせる景色である。去年の春渡歐の途、ジエノワからミラノをさして同じ川の上流を横ぎつた時、古風な幼稚な歌を詠んだことを想起す。北嶺の雪を、薄霞を透して鮮かに望みながら、西南の方へ向つて行くと、東海道のを懷ばしめて、昔四月の休暇に駿河の山麓を通つて郷里に歸つた時分の氣分になつて來た。氣のせい、段々濃くなる空の色や、段々強くなる日の光の刺戟に感じて、若い心が躍りさうになる。いつしか、沿岸の平原を過ぎて、破壁に藤の花まつはる村落に入り、漸く青陵の起伏する間に進む。

ポネチアを去つてポー川を渡る

に進む。

紀伊太利亞の紀行

古詩人の『伊太利亞紀行』を取出して、ポネチアの節を拾讀みすると、自分が僅か三日間の滯留ながら其間に起し得た興趣の乏しかつたことや遭遇し觀察した所の平凡であつたことに益々氣が付いて來る。古詩人が、滯在半月餘の間に、幾度も觀劇をして、犀利な品評を下して居る所を讀むと、現代の戲曲家の新作を見逃がした不平が心の底の方で動く。段々紙をはぐつて行くと、十月七日の段月明に乗じて、ゴントラを泛べ、艫に一人、艫に一人、名高い磯節を歌ふ男を連れて、掛合に歌はせて聞いたと云ふ條に至る。一人の謠者の話に由ると、小島の汀に小舟を泊めて、一方で高調に歌ふと、鏡の如き海面に響き互る、遙か彼方で他の一人がそれを受けて、次の歌を吟する、彼一句、此一句、相呼應して、終夜がら續ける、二人の間が遠く隔るほど、益好く聞える、中間に居て聴くの

嶺南思出草

は、興が無いのださうである。そこで、彼の二人は、此を實地に試して見せようと、舟を繋いでジュテツカに上り、岸邊で遠く相離れ、詩人に歌つて聴かせる。ゲーテは、と行き、かく行き、兩方の端に立つては、遠くから到る吟聲に耳を側だてて、涙催すまでに感じたのである。船頭の磯節は、獨特のメロヂーで、タツソーや、アリオストーを歌ふのである。リドー邊の蟹の女達が歌ふのを聞くと、又格別だといふ、海人は、夫が沖に漁に出て居ると、夕暮濱邊に出て、澄透る聲で歌ふ、其中に海上から聲が聞えて来て、此から掛合になる所は何とも言はれぬ氣持だと、船頭が多感の騷人に語る。白氏の詩を誦するが如き感が湧いて、自分は此の詩趣ある紀行の一節を讀みつゝ恍惚となつて居た。然し、百二十年前の磯節が、今でも水の都に其遺韻を傳ふるか如何かは、知らぬけれど、せめてゴンドラに棹して春宵の一刻を過ごせばよかつたものをと悔む。

かくて、ターナーの畫いた朝の色をも其處に賞し得なかつた不満足を以て、所謂『光明の都』に遠ざかりつゝある自分は、今しもフエルラに着いたのである。

其昔の遺蹟は指願の間にあらうと思はれても、汽車は唯青山の間の小市に沿うて進行するばかりで、何等の眼を惹くものは無い。同じ紀行に由れば、ゲーテは、十月十四日、客船に乗じて發し、行く／＼江を溯り、古歌を吟じて北緯四十五度を横ぎり、江岸の風景を賞しつゝ、此古都に着いた後、騎して氣忙しなく遺址を見物したとある。不平であり、不幸であつたアリオストー、タツソーに就て記する所は極僅であつた。

此紀行の著者が、嶺北に歸つて完成した戯曲『トルカートー・タツソー』を舞臺で観ると、エステ家の別墅で、遊園を飾る大理石柱の下を、館の姫君と上臈エレオノーラとが、輕羅を絡うて、織手で花環と月桂環

嶺南思出草

嶺南思出草

を束ねて居る所で序幕が明く。一方の石柱の頂は、并ルギリウスの首、他方はアリオストーの首で飾つてある。兩叙事詩人の白い像が、南方の清らかな青空に映じて、典雅な景の中心になつて居ると、嬋妍たる淑女が、各々作り上げた環を詩人の像に冠らせる。すべて長閑な情趣であつて、當時自分は能樂で起る一種の興を、此場で催したのであつた。後になつて、狂亂詩人の本色を現はす場に至ると決してさうではないが、殊に序幕でタツソの登場のあたりは、斯の如き感興を禁じ得なかつた。やがてアルフォンス公も來合せて、三人で詩人の新作の噂が始まると、最早く詩客を遠方に認めた姫君は「妾こそタツソの來るを見申して候、徐かに歩みを運ばせて、或は緩く、或は急に、——あれ又立止りて候」といふ。「潜思詩作に耽る身の夢ばし覺まし候な、唯吟行はせ候へ」と兄君は沮む。レオノーレが、「いや、吾等を見留めて、此方へ來り候」と云ふ

程に、三人は上手に在つて、彼方より徐ろに近づいて來る詩人を熟視して居る。自分は揚幕から出る「羽衣」の天女を待つ興を以て迎へると、黒衣を纏うた多感の騷人は、新作『聖府解放』（ラ、ジェルサレンメ、リベラータ）の稿本を手にして、下手から登場する。「此書を捧げばやと参りて候が、未だ整はぬふしも御座候程に、おん手に參らするを躊躇ひ申候」とつゝ、まじやかな詞があつた後、遂に意を決して奉呈すると、アルフォンス公は之を受納する。謝辭、謙辭、讚辭が双方の間に濟んでから、公の胸に應じて、妹の姫は、并ルギリウスの石像の首から、月桂の環を取つて、之を此新叙事詩人に戴かせようとする。詩人は謙遜して身を後去る。傍の上臈は、「何とて否み候ぞ、御覽候へ、此の美しき枯れせぬ環を、御身に被けられうする御手をこそ」と言葉を添へると「なう、待たせ給へや、斯くて後は、いかに世を経申すべきやらん、思ひも寄らす候」

嶺南思出草

嶺南思出草

と承引しない。姫は環を高く捧げながら、「いかに、タツソ、妾にこよなき喜びを受けさせ候へ」とあると、是に至つて、始めて才人は、「其の美しくしき重荷をば、御身の貴き玉手より、我が孱弱き首にこそ、いざ膝まづきて受け参らせめ」と、やをら屈むと、姫は環を被ける。月桂環の授受の優容閑雅なのが、尙更能掛りに感じられたのは、氣のせいに違ひない。其後、詩人は事を以て家老と争ひ、暇乞して當家を立出でようとする時、別に臨んで感激の餘、思慕の果、やんごとなき姫の前に跪いて、將に玉のおん身をかき抱かんばかりにすると、「其處退き候へ」と狂亂詩人を突退ける邊も、矢張謠曲を想起させた。……

斯くの如き古めかしい空想に耽りながら、昔のアルフオンス公の城下フェルラを、今しも後に残して、タツソの生涯を追懐した。狂詩人は遂に城下の一院に幽せられたが、其遺蹟はゲータにも弔はれたこと、

其紀行に見える通りだ。尋いで、我が若い想像力は、謠曲趣味から起つた足利時代の連想を桃山時代に向はせて、三百餘年前の日本の公達どもを、タツソ―幽閉當時のアルフオンス公の館に再現せしめた。

宋元系統の、色彩の淡い、感情の涸れた室町時代の禪宗文明が、其末期に、嶺南諸國の濃厚な、強烈な調子を帯びた吉利支丹文明と接觸して、將に何等か爲す所あるやうに見えて、而も内外の形勢の爲めに果敢なく終つて仕舞つた其徑路は、史典を催さしめ、併せて詩趣に富む所である。外教の勢力が全盛であつた安土桃山時代に、我西南諸國に於る新文明の代表者が南歐の大國に使を遣はした時、其等の使節は年齒弱冠に満たざる公達であつて、智識に渴し、感情に豊かに、突如十六世紀末の文藝復興爛熟期の文物に接して、如何に之を見守り、如何にそれから刺戟を受けたかを追想したくなつて、自分は今この旅路に無限の興味を覺

嶺南思出草

嶺南思出草

え始めた。たしか千五百八十五年、天正十三年の夏鈍満所伊藤義賢を始め、大友有馬大村三侯の年少使節が、伊國都鄙到る處の款待を受けて、フェルララに着いた折は、アルフオンス公は、格段なる待遇を與へて、珍客を城中に留め、其去るに方つては、舟を舩してポーを下つてエネチヤに送らしめたとある。其頃の城下は、全盛の頃であつて、今吾等が汽車の窓から見た小都會とは、比べものに成らなかつた。この所謂「印度の公達」を見て、上臈衆は、「沙翁の喜曲中に出て来るモロツコやアラゴンの公子に喫驚したポーシヤ達とは全く異つた印象を得たであらう。狂亂詩人は、既に幽居中であつて、極東異人の面影をも知るに由なかつた。更に回想は再びエネチヤに復る。一行は、旅に病んだ使節の一人中浦を後に托した後、江を下つてキオチヤを経て、異采ある水都の客となつたマルコ・ポーロ以來音に聞くジバング人を、今始めて目撃して相も變らぬ

厚遇である、或時はリドの城に請じて、月明の夜に其近くの海上に舟遊を催した。ゲーテの遊んだ當年の秋から數へて、正に二百年の昔である。同じメロチーの磯節は何を題目にして歌つたか。雄飛時代の少年は、興に乗じて故國の小歌を聞かせて、一座と樂を分ちしなかつたらうか。又或時は、巨費を投じて、チチアンの門に出でた名工チントレットに托して、使節等の肖像を畫かせて、之を評定所の壁に懸けることを決した。此像は、惜哉近時佚して所在が分らなくなつたが、今も奉行所の大廣間に見物人の眼を惹く「極樂」の大圖を始め、大作に富む此エネチヤ派の老工の同じ手に掛つて、桃山時代の派手な模様が如何なる色彩に畫かれたらう。茶筌鬚に結んだ矮少なる日本人の姿も、半身ならばエラスケスが畫いた侏儒の様になりは爲なかつたらう。兎も角開元天寶時代に入唐した正副使節藤原清河、吉備眞備の貌を玄宗皇帝の供奉で畫いて、蕃

嶺南思出草

嶺南思出草

藏中に納めたと云ふ話よりも、名譽なこと、語傳へてよい。
斯くて使節等は一寺院の外壁に、羅典文を勒した大理石板を紀念に遺して、現存この多趣なエネチヤを去り、尙南歐諸都を巡歴して後、再び八重の潮路を越えて日東に歸つた。歸ると、外教の形勢は一變して居たが、天正の末年聚落の第で秀吉に謁した時、嶺南の風土文物をいかに説いたか、秀吉は又之を聞いていかに刺戟されたかは、固より舊文明の傳燈者たる僧侶や公卿の日記などに傳はるべくもない。然し、南國から傳はつた西洋文明の曙光が、初には葡國の薄倖詩人カモエンスの詩篇に表はれ、後には西國の宗教詩宗ローベ・デ・エカの作曲に現じ、中頃は水都の大畫工チントレットの美眼に映じた後、當然國家の障壁に遮られて、外の星に光を譲りつゝ、殆どあるかなさかのさまに消えてしまつたのは、悲曲流の末路に類し感興の深い史題である。

縷々として極なき空想の絲も、いつしか断れて、汽車はもうポロニヤ近い。嶺南の春の夕暮は、更に別趣の興を起さうとして居る。

(明治四十四年一月)

鎖 國

唐の物は藥の外は無くとも事缺くまじ。ふみどももこの國に多くひろまりぬれば書きうつしてん。もろこし船のたやすからぬ道に無用の物どものみ取りつみて所せく渡してもくるいと愚かなり。遠きものを寶とせずとも又得がたき寶を尊ますとも、ふみにも侍るとかや。

兼好法師が斯う書きつけて置いたよしなしごとが、三百年後の徳川時代には半ば實現されたのは、「怪しうこそ物ぐるほしけれ」とも云ふべきであらう。例へば天和三年に長崎奉行に達し又唐蘭の商人に論して、羅紗、

鎖國

猩々其外毛織の類並に金糸其他衣服に用ふべからざる織物、珍禽奇獸及び藥品にあらざる植物、木材はた器財器具の類の賣買を禁じたのも、貞享二年に唐船舶載の、西洋教學に關係ある書物を燒棄て、長崎に書物改の役人を任じて寛永七年の禁書令の厲行を勉めたのも、共に鎖國政策の一端が現はれたものである。尋いで元祿の初期に日本に渡來して在留二年、具さに本邦の事情を見聞し研究して歸つたケンペルは、其名著日本史の結末に「日本と外國貿易」の一篇を附して、我國が地勢物産の上から鎖國に適して居たこと、國家の自衛、風教の維持上、鎖港の止むを得ざることを詳論して、此政策を稱揚し、并ルギリウスの詩句、

Hic segetes, illic veniunt felicius Uvae;

India mittit Ebur, molles sua Thura Satae.

此有饒禾稼 彼有美葡萄

印度出象牙 沙巴産名香(二)

を引きつゝも、斯島國は必しも他邦と有無相通するの要なき所以を述べ(三)「ソクラテスと概ね同じき孔子の學」を奉じて斯民を治むる將軍綱吉を讚美した。この一篇は、百年の後享和元年に至つて長崎の學者志筑忠雄が譯出して鎖國論と題し、評註を加へた以來世に知られて居る。鎖國の利害得失を攻究するのは、今本稿の主眼ではないが、當時内外の事情が「國當ニ鎖閉」に適して居たことは争はれない。而も我國が歐洲に於て時勢後れとなつた耶蘇舊教の桎梏を脱し、衰運に瀕する南歐の影響を離れたことは、望外の幸であつた。ローマンス南土の廢頽した舊文明舊思想と絶つて、北の方ゲルマニヤの新興の氣に一步近づいたのは、偶然ながら國民の利益であつたに違ひない。況んや我國が對外關係の煩ひなく、専ら内治に意を委ね、學藝の興隆を力める間に、極めて徐々に極めて少量

鎖國

づつながら、遠西の新智識を輸入することを忘れなかつたことは、近世文明史上最も興味ある點である。されば所謂鎖國によつて日本は新智識を十分咀嚼消化して精神上の餘裕を存することの出来た好都合もあつた。又さらでも増進して底止する所を知らざる國內の奢侈を、あれでも餘程控へさせることが出来た。要するに鎖國政策は當時にあつては、止むを得なかつたばかりでなく、利益であつたことは多言を要せぬ。尤も寛永より嘉永に至る二百餘年間——西紀十七世紀の中程より十九世紀の中程にわたる——を鎖國期とするが家光の寛永から吉宗の元文頃までの初めの百年間こそ嚴密な鎖國期であつて、それ以後の百年間は洋學が開け徐に開國の準備中であつたのである。開國が突如として何等の準備なく起つたのでないと同じ様に、鎖國も亦島原亂の結果俄かに出来たのではなく、天文より寛永に至る海外交通期約百年間の下半期はいはゞ西教

迫害の時期であつて、開放の門戸を少しづつ閉鎖しつゝあつたのである。而して遂に一條の間隙を存して堅く扉を閉鎖した後、用心堅固に此扉を内から押へつけて居た最初の百年間、殊に元祿時代までの約半世紀こそ却て史興が深い様に思ふ。この細き隙から洩れ来る光を成るべく防がうとし、内に残る西國の香の名残りを消さうと勉めた數十年間の壓迫期は、新井白石を過渡期の西洋研究家とし、間もなく青木昆陽より開始する蘭學發達期の稍開放的なる時期に比して割に面白味がある。然し今は單に文運極盛期なる元祿時代の對外的態度ともいふべき點を中心として鎖國の嚴密であつた期間の世相に對して、聊か文學的側面觀を試みるにとゞめる。

シヤ井エル聖人が本邦の西邊に蒔いた耶蘇舊教の種子は、數十年間に全國の大部分に擴がり、學林では羅旬語が學ばれ、寺院では洋樂が響き、

鎖 國

受難劇が演ぜられる、活版や銅版の術も渡れば、繪畫も傳はる、宗旨や教訓上の書物も數多翻譯され、天文醫療等の學術が傳來する、教徒は歐西の正朔を奉じ、耶宗の法名を附けると云ふ有様で、彼の西土に在ては既に陳腐に屬しかつて居る文物も、此の日東に於ては新奇を以て迎へられたのであつた。然し是等文物輸入採取の史料は、徳川時代の耶宗禁制の酷烈であつたが爲に、記録にも實物にも残つてゐるのは、甚だ僅少であつて、まとまつた一部の記録にては耶宗の惡むべき所以を述べた斥非の書に留まるから、彼方に存する幾多の宣教報告書や布教史などに據らざるを得ないが、兎に角奥南蠻の文化は國民の或層に浸潤して、國家に對しては危険思想を不知不識の間に助長し、鎖國の因を成すに至つた所もある。一方には、此土より伴天連共が年々書送つた布教報告書は直に印刷に附せられ歐洲諸國の言語に重譯されて流布したから、十三世紀

末のマルコ・ポーロの紀行以來歐人の注意を惹いた日本の國情が、耶教弘布の消息に伴うて普く彼に知られる様になつて、邦人が珍重されたのは意外な程であつた。天正年中伊太利亞に渡つた九州の大名の使節は、ゴネチャ派の巨匠で、かの水都の宮殿に畫がいたチントレットに肖像をかゝれたといふではないか。慶長元和の際の西教徒迫害の結果は、西班牙の文豪ローベ・デ・エガをして筆を執つて *Triunfo de la fe en el Japon* (日本に於る信仰の凱歌)と題する、敬虔の念に満ち優麗誦すべき史話を草せしめたではないか。伊達家の使臣支倉はエラスケスが居る頃の西班牙を過ぎて羅馬に使ひし、船長セーリスは、沙翁晩年の頃、英王ジェームス一世の國書を以て渡東し來り家康に謁した。よしんば彼我が接觸は畢意皮相に過ぎざるにもせよ、又東西年代の對照が閑餘の徒勞に終るにもせよ、情の上よりして、若し當代東漸中の西方文明に執着した

鎖 國

鎖國

らば、鎖國に對しては無限の恨が繋かれるのである。あの上開國を繼續することの弊害を極端に考へるよりも、寧ろ鎖國しなかつたらば、新來の西洋文物に接して徳川時代の文化は如何に光彩を放つたらうかと考へて見たくなる。されば踏繪の面のいたくしい姿を見ても、土に穢れた子安觀音の片割れを眺めても、唯耶宗迫害の痛ましさを覺えるのみではない。煤けた洋畫の色彩や、擦れた南蠻寺の鐘の銘に、今も諸方に傳はる屏風繪で見る黒船出入りの壯觀を想像しつゝ、消えゆく文化の影を見送る心地がする。角屋の地圖や清水堂の繪馬を見ずとも、虚構もよじるジャガタラ文に、盡きぬ恨みの哀音がこもる。

寺請證文や起請文に宗門改は嚴重であつて、當局者は士民を否應なしに佛教に歸依させて仕舞ふ。國家の前に何の信仰の自由があらうぞ。それでも西邊の孤島や僻村には永く遺教を傳へて、聖像を或は壁に塗籠み、

鎖國

或は觀音に托し、お水方には洗禮を司らせて、侏儒の語に信條を寓して、密々に一念を遂げたと聞く。長崎は切支丹寺院學林の最後まで存立した地であつて、當局者の夙に意を注いだ處と見える。先づ徳川氏が歸依する淨土宗の大寺に稻佐の悟眞寺がある。異教徒の歸正、釋家の勸化の爲に夙に慶長の初年より聖譽上人の布教があつた。遂に幕府の公牒を賜はつて大寺となり、後年阿蘭陀人の遺骸をも其墓地に葬る様になつた。同じく淨土宗に大音寺といふがある。慶長の末年に開山傳譽上人が來て説法教化に勉め、轉宗者が甚だ多かつたので、寛永の島原亂の後に、松平伊豆守から賞與を貰ひ、御朱印をも賜はつた。長崎には唐寺又は南京寺と呼んで、唐人が開基の寺院が澤山ある。鎖國中でも支那との關係は格別であつて、亡明の僧俗で一かど傑れた者どもが、本期の初半世に屢渡來したことは、一々列擧するの要もない。禁書を除き、新刊の唐本も續々舶

鎖 國

載された。書畫其他の藝術も愛翫され、詩文の應酬も我邦の操觚者には悦ばれた。支那は華、西洋は夷と定まつて居たから、唐蘭二國に對する態度や心持は其間自然違ふわけである。鎖國は西洋に對する鎖國であつて、支那文化の保護と西洋文物の壓迫とは反比例したとさへ思はれる。されば崎陽の南京寺の數々は、往時の南蠻寺の偉觀を壓するばかりで、既にケンベルも若干を枚擧して居る。福濟、弘福、聖福、崇福等皆新渡の黄檗派の禪寺である。

瓊浦に響く鐘の音は、切支丹の遺韻を鎮めはてたと思はれる上に、更に靈驗あらたかな諏訪神社は、長崎の鎮守となつて、この神國が切支丹に穢れぬやうにと護ります。代々の神官青木氏の祖は、元和年中この祠を再修して邪宗徒の根絶を圖つた有難い人である。長崎に於て古典詠歌の學びが開けたのは、青木氏に負うて居る所少くない。この神社の東に

方つて聖堂があり、寺院、神社と相鼎立して、切支丹の危險思想の撲滅を主とする。即ち幕府直轄の長崎奉行が支配する立山の明倫學校である。其起因を尋ねると、寛永鎖國後、十年も経たぬ正保四年に向井元升といふ儒醫が奉行に願出でて聖廟と共に創建した立山學校の後である。元升は爾來十二年子弟の薰陶に力めた後、萬治元年京都に家を移し、其繼續者を缺いて居た。所へ、數年後の寛文三年には堂舎が焼ける、十數年を経て漢學好きの奉行牛込勝登が再建して京都から來た南部草壽といふ儒者を聘して聖堂の主とする、間もなく草壽も越中に招かれて去ると云ふ次第であつた。其處で向井元升の三男の元成が、之に代つて京から長崎に赴任して來て、立山の祭酒となつた。これは延寶八年の事で、鎖國以後四十年になる。元成は、父も勤めた唐本改の役目を嗣いで、寛永七年の禁書令により新渡の唐本を検査することとなつた。現に貞享二年に禁

書の舶載を發見して褒美にあづかつた。爾來この書物改の役は、かの學校の監督と共に向井氏の世襲となつて明治に及んだのである。何時の世にも書物改は、動もすれば、極端まで及びたがるもので、寛永の禁書目には純然たる宗門の書物の外に、噂とか名目とか唱へて、如何なる唐本でも、耶穌天主の名稱や、西洋人の名字が見えたり、或は幾分か西教の事に關係したりすると、輸入を禁じ、天文地理算數等の著譯書も當期の鎖國嚴密な間は矢張排斥されたのである。その癖、本邦には斥耶穌に關する著述や、島原戰記の類の中に名目や噂が存しても構はなかつた。且つ徂徠が政談四卷に「吉利支丹宗門ノ書籍ヲ見ル人無キ故ニ其教如何ナルト云ヲ知ル人無シ、儒道佛道神道ニテモ惡ク説タラバ吉利支丹ニ可紛モ計難シ、是ニヨリテ吉利支丹ノ書籍御庫ニ有ルヲモ儒者トモニ見セ置レテ邪宗ノ吟味サセ度者也」と論じた位で、其時までは一部の御用儒者に

も禁書を閱讀させなかつたのである。

向井元升の經歷は、當代の通俗教育の泰斗貝原益軒が撰文の墓誌にも見えて居るが、其の最も有名な事蹟は乾坤辨説の編纂である。鎖國後程なく寛永二十年に日本の近海に黒船が前後相尋いで二隻あらはれて當局者を驚かせた。一つは筑前沖の大島に漂到した南蠻船で、もう一つは奥州南部の近海に來た和蘭船である。和蘭船までが、切支丹の卷添へに逢つて迷惑した始末は茲では別問題とする。黒田家の手で捕へた南蠻船の伴天連どもは、江戸に護送されて糺問されたが、後に非を悔いて改宗し所持の天文書を獻上した。歐文で讀める者がないので、當時轉宗して我國俗に循つて居た葡萄牙出の忠庵といふ者に和譯させて横文字で書出させた。南蠻通事の西吉兵衛が之を讀んで、向井元升が傍から國字で筆録し、各本説に自己の辨説を加へて編した書が、乾坤辨説である。原書の

名も著者も分らなければ、又原文が何の國語かも知られない。忠庵の和譯したのが慶安三年で、元升等の横文字から筆録したのが明暦二年の冬である。随分面倒を掛けて編じたもので、其上更に陰陽五行説などで論駁を加へたのも、念の入つた事である。長崎奉行では最初は忠庵の譯書を他見させなかつた程、嚴に取締つたが、後には辨説も附いて、少しは流布するに至つた。元來この天動説を奉ずる舊式の天文書を懐いて舊教の坊主が筑前沖にさまよつて來た寛永二十年は、ガリレオが死んで、其代りにニュートンが生れた西紀一六四二年の翌年であつて、コペルニクスが地動論の出版中に死んでから百年も経つて居る。歐羅巴で廢れた舊説を今更西洋の新説として排斥せねばならなかつた日本は憐れなものであつた。半世紀前の慶長十一年に林道春が耶蘇會者不干と地の平圓を論じたのは、まだ恕されるが、乾坤辨説の始末は、今より考へれば滑稽の至

である。寛永以來の禁書でも、吉宗が其禁を解いた天文書でも、皆かゝる時代後れの學説が明末清初に譯出されたものに過ぎぬ。

「辨説」の編者は醫者として名高く、加州藩から招かれて、松雲公に食物養生の法を説いたこともあつたが、延寶五年に六十九を以て歿した。長男の元端は、醫術で京に残つて高貴に出入し、三男の元成（魯町）は父の歿後三年長崎に歸り、聖堂の祭酒と書物改の役とを勤めて子孫代々襲職するやうになつた。恰も此の延寶の末頃は、大阪あたりで西鶴の俳風を罵つて伴天連宗とか阿蘭陀西鶴とか呼び、尋で阿蘭陀丸二番船などといふ俳書も現はれた位で、異端を排するに是等の套語を弄する時勢であつた。元升の次男は蕉門の高足去來であつて、鎮西の俳諧奉行たる名聲を博した人である。濃厚篤實、能く父兄の名を辱めず、蕉翁の知遇に反かす、文武の間に入出入して風雅を樂んだことは細説を要せぬ。妹の千

子は京に、弟の魯町卯七は長崎にあつて、共に七部集中に若干の句を殘して居る。魂棚の奥に親の顔をなつかしみ、手上に消ゆる螢に妹をかなしみ、何事ぞと花見る人の長刀を咎めながら、秋風に白木の弓を張るを忘れぬ武士魂より湖水の五月雨、岩ばなの月、嵯峨の柿の木に至るまで去來の俳句を味へば、向井一家の風貌の想見されると同時に、乃父靈蘭翁の人格をも思浮べられる。斯くて吾等の考察は元祿の時代に入る。

元祿と云へば、直に一種の氣分が涌いて來る、様々の事が思出される、偉人巨匠の名前が胸裏に蝟集し始める、色々の現象が眼前に浮ぶ様になるが、今更茲で其世相を説くの煩を避けて、將軍綱吉の一代三十年のうち殊に初半世について好學の狀を一瞥して置くと、先づ儒者には林信篤の外、更に木下順庵を召出し、神道家には吉川惟足に祿を授け、天文方には保井算哲を任じ、歌文の學には北村季吟父子を擧げる、釋家では湯

島靈雲寺の覺彦、増上寺の祐天、護持院の隆光を尊信すると云ふ様な事は、皆天和より貞享を経て元祿の初年にかけてである。諸藩には會津中將、新太郎少將に踵いで西山公や松雲公が出た。藩にも野にも、江戸でも京阪でも、諸般の學藝界に人材の輩出したことは、當代を最とするといつてよからう。幕府の記録に従へば、綱吉は皇室の尊崇に、山陵の修復に賀茂祭の再興に、能く皇道の發揚に勉めたのみならず、生母には孝を盡し、下民には節儉を勧め、窮民の賑恤、生物の哀憐、とにかく一かどの名君たる資格を備へた。武徳太成記の修史や二十一史の刊行より經義の講説や聖堂の新營に至るまで儒道尊崇の念の厚かつたことは、佛法信仰の心の深いのに勝つた。斯る治世に宗門改や書物改に益、油斷のないのは當然である。天和から貞享へかけても此等の禁制が續出したことは茲に一々擧げまい。一二は前に示した通りである。江戸でも長崎でも

鎖國

神儒佛の道が益、榮えて吉利支丹の教は、鬼理至端だの奇栗叱彈だの貴利死貪だのと、在らゆる汚名をつけられて排撃されて仕舞つた。排撃者の中には古くは元和のハビアン、明曆に死んだ鈴木正三、近くは元祿に逝いた淺井了意等の僧侶あがりの文士がある外、寛永より元祿あたりまでに、切支丹の來朝や南蠻寺の興廢や島原の戰亂等の記述者は随分多い。殊に熱心なのは鈴木正三入道であつた。是等の徒は云はば一種の國民道徳の鼓吹者に當る。貞享に轉び伴天連の岡本三右衛門が小石川の切支丹屋敷に死んでから、寶永の末、綱吉治世の終りに宣教師シドッチが盲蛇に怖ぢず健氣にも大隅の海濱に渡つて來たが、却て天の與へと我國に利用されて、後期洋學開始の運を開かしむるに終つた。

鎖國中として其頃は年に一度蘭人の江戸參禮があつて、異域の風俗は長崎以外にも見られる機會はあつた。將軍家を始め江戸や京大阪の諸役人

への獻上物附届けは遠西南國の土産は勿論、時には望遠鏡、寒暖計、時計、樂器の類もあり、將軍家へ地圖類の贈呈も明曆萬治寛文の際に都合數度あつた。寛文の三年には、阿蘭陀本草書一冊を獻じ、十二年には世界圖を奉つた。新井白石が使つた官庫所藏の地圖は此時獻上のものであつたらう。鎖國後四十餘年も経た天和二年からは、太平の餘澤と將軍の娛樂とに、所謂和蘭貢使の御上覽の際、歌舞音曲を演じさせ、種々の言動を試みさせ、問答に揮毫に年々蘭人を迷惑させて居たが、畜類御憐憫の犬公方様も異人に對する賢察は無かつた。こゝらが愚の頂上で、やがて白石や吉宗や昆陽が出て蘭使も能く利用される様になつたのである。尤も鎖國の前半期に於ても江戸幕府で蘭人の智識を全く善用しないことは無かつたので、前述の寛永末年に南部で捕へられた蘭人のうち、火術師外科醫等四人だけは慶安三年まで凡六七年江戸に留置いて幾分其藝能

を用いた様である。或は慶安初年に參府した蘭使隨行の外科醫カスバル某と云ふ者が所謂カスバル流の外科を傳へたとの話もあるし、元祿時代にしても、一二この類の事蹟は存する。貞享二年には奥醫師瀨尾昌琢が、公命に由て、參禮中の蘭醫に就いて外科の術を尋ねた事があり、元祿十五年には、曾て長崎から召出されて幕醫となつて居た栗崎道有が、矢張出府中の蘭醫に従つて外科の話を聞いた事がある。綱吉の治下にも此位の西學は入つた。

長崎に於ては南蠻系、紅毛系の醫家で、栗崎、杉本、西、檜林、半田、吉田、村山等の舊家があつて、中には通詞の家もあり、鎖國以前からの人もある。寛文の初年杉本忠恵が幕府に召され、尋いで西玄甫が登用される。元祿には四年の六月に栗崎道有が村山自伯や吉田自庵と共に幕府に召出され、九年には桂川市筑が侍醫に擧用された。市筑は天明以後の蘭

學界に代々其名を顯はした桂川氏の初代であり、道有は呂宋に外科醫術を學んだ栗崎道喜の曾孫で、幕醫に徵されてから、元祿十四年には命に依つて吉良上野介の刃傷を診察したと傳へられる。是等二人は寛文の初期に生れ、元祿の初期には長崎に於て三十歳近くの壯年であつた。斯くも洋法醫術の傳來はあつても後年來朝したツンベルグの評語を借りて云はば、馬醫に及ぶか及ばぬかの幼稚な程度に止まつて居たらうけれども、「藥の外は無くても事缺くまじ」といふ鎖國時代には、頗る貴いものときれたらう。又當流を汲んだ醫書の寫本刊本で寛文元祿の際に出たのが見受けられる。

崎陽に於て醫術と共に西説を受けたのは、洋學發達時代と同様に、矢張り天文學であつた。正保三年に刑死した切支丹宗徒の林吉左衛門は、西洋の天文説を承けて居たらしいが、門人には小林義信、小野昌碩、吉

村長藏等を始め數多あつた。義信は切支丹の連累で囚へられたが、禁錮二十餘年の後、免されて、寛文の末來任の奉行牛込勝登が學を好み士を愛するが爲め、知られて、鎖署に出入するに至つた。京より下つた南部草壽を奉行に薦めたのも彼である。又南蠻文學直傳の關莊三郎をも門に入れて牛込氏に介したのも彼であつた。爾來延寶年中を通じて在任した此の名奉行は、貿易の施設にも功績があつたが、興學の上では、聖堂再興、儒者登用の外に、西説の毛嫌をしない程の達識はあつた。後年吉宗に召された西川如見の如き學士を長崎より出したのも偶然ではない。然し貞享に擧用された天文方の算哲は、京都出身の學者で、西説に直接に負うて居る所は無様である。

日本研究家

鎖國の上半期に西人が日本の事情について著述した書物の中、南蠻切支丹派の編纂物は語學書にせよ布教史にせよ、前代に於る視察や報告を材料にしたのである。寛永のソリエー(佛)でも、萬治のバルトリー(伊)でも、元祿のクラッセ(佛)でも、正徳のシャルボア(佛)でも、基督教史となると、皆前代の事にかゝるのは無論であるが、阿蘭陀系統の著者として、事柄は新代の事でありながら、觀察には特に新しいと云ふ節はなかつた。元祿のケンベル以前には主に報道的であつて研究的ではなかつた。寛永年中に日本に在留し濱田彌兵衛の頃の甲比丹であつたカーロンにせよ、葡國の教父や蘭國の使節の報告を骨子にして遠西の故事で肉を附けた寛文のモンターヌにせよ、史料は在つても考察は缺けてをる。其他の甲比丹及び隨從の醫師輩にも少しは學問のある者もあり、調査した結果も残つて居る。延寶の初年に來朝したテン・ラインの茶樹に關する調査は羅甸文で出版された。其末年にはクライエルと云ふ學士が渡來した。又フリースに率ゐられた和蘭の探檢船の僚船が寛永二十年に南部領

鎖 國

で窺められた以來、享保年代に至るまでの八十年間は、西洋の大船で日本近海に出没して探究を試みる者もなく、四海浪静かであつたけれども、如何に鎖國の世でも日本の船が風波の爲に國圀の外に吹流されて鞆や千島や勘察加や北米や又は南洋の島や印度支那などに漂著するのは防ぎ様がない。運好く本邦に送還された舟子どもも、此鎖國の前半期には格段な注意も受けず粗笨な學術的資料をも供するわけにはいかなかつた。之に反して露西亞の東洋經營と西比利亞探檢は寛文より元祿寶永に入つて漸く進んで來た。ペーテル大帝の治世は天和の初より享保の半ばに及び、綱吉の一代より吉宗の半世に亘り、貞享にはイルクーツクが都市と榮え、元祿の中期にはカムチャトカが侵略されると云ふ有様であつた。越前の民が鞆鞆に漂到して清國から歸つて二十年餘の後、和蘭のキトセンは寛文延寶の際七八年間東北鞆鞆を探檢したが、其結果が出版さ

鎖 國

れたのは、元祿の初期である。瑞典人のストラレーンベルグが西比利亞の探究は十有餘年に及んだが、其流竄は正に新井白石が伊人を尋問したのと同年である。躬から船大工となつて和蘭に造船術を學んだ程の大帝は、日本ではまだ大きいくと屋形船の型をさへ更に小さくせよと合した元祿の世に、此海國からカムチャツトカに漂流した舟夫どもを、新都彼得堡に上らせて日本語を教へさせた様な遠略があつた。ペーテル時代と綱吉時代、遠征と鎖國、何と云ふ對照であらうぞ。

仇し仇浪寄せてはかへる浪と一蝶の小唄が流行つた時代の初め、年々に寄する紅毛船が元祿三年に限つて珍客を載せて、ジャガタラから長崎に著いた。日本の陸が見えると、祈禱書其他の切支丹書を例の如く銘々船長に預けて古箱に詰込み、船底に隠して仕舞ひ、そしらぬ顔をして長崎に著いた。此船で來た珍客は、獨逸生れの學者エンゲルベルト・ケン

ペルで、徳川時代の日本研究家中名士の随一とも云はれる。好機も好機、元祿の盛世に來合はせたのである。日本には一外科醫として甲比丹に從ひ二度將軍に參禮したのであるが、元と歐洲北部の諸大學に學び、專ら理學と本草學とを究め、兼ねて哲學歴史地理にも秀で、語學にも達し音曲にも堪能であつた才人である。瑞典の朝廷から波斯に遣はされた使節に隨つて、モスコビヤの領土を経て波斯國に入り、我國では芭蕉が行脚して廻つて居る頃、此西域の風土博物を具さに研究し、有益な結果を得た後、海槎に身を托して極東へ志したのが元祿元年に當る西曆一六八八年の夏であつた。ケンベルは自ら鎖國論の末に、「たとひ頭を廻して往古民生素朴なりしの時を察すとも、或は日本古事跡の記を取て評論すとも、其國の福祿満足なること今の時に若かざる事を悟らん、御するに稱望の主を以てし一切異俗通商好通の外に保護鎖閉せり」と當代を讚美し

て居るが、其元祿四年五年の兩春に定例の如く甲比丹に隨つて參府した。初回は、芭蕉が湖東の無名庵に大津繪の筆はじめを吟じた春、去來等が猿蓑を編する頃、ケンベルの紀行文の挿繪に見える様な行列物々しげに京洛を過ぎて一行は江戸にゆく。二月三十日が謁見の日である。老中の牧野備後や、若年寄の柳澤出羽等も列席の大廣間へ、老通詞横山與三右衛門の通辯で甲比丹や學士ケンベルが出る。無論將軍は御簾の中に居る。双方で相當の挨拶が濟んでから例の質問が始まる。當代流行の輕口噺にでもありさうな問答もあつて、末には阿蘭陀の醫師に不老不死の靈藥が發明されたかの、などと御上意がある。綱吉にしては尤もな問である。眞面目くさつて醫者は、左様な藥は弊邦などでも永年苦心して居りまするが、シル非ウス先生の何々丸と申す藥がと、其名を羅旬語で言上する。覺えにくい名で度々聞きかへす。然らば次の船でジャガタラから取寄せ

カピタン
はをつくば
はせけり
君が春
(芭蕉)

鎖 國

いと仰せである。次の場は更に面白。御簾越しながら將軍家は蘭人どもに禮服のカツバを取れ、直立しろ、さめい、立つて二人で辭儀をして見ろ、躍れい、跳ねい、酔ひどれの眞似をせい、日本語でしやべろ、和蘭語で物を言へ、晝をかけ、歌をうたへ、上衣をそら着ろ、そら脱げと、全く玩弄物である。將軍の外、大奥の婦人達も隙見して居るのである。何と云ふ奇觀であつたらう。甲比丹は會社の利益のため、ケンベルは學術のため、初から名譽を犠牲にして掛つたものである。學士歌舞の圖は、其著の挿繪に見える通りである。彼は舞ひながら獨乙語で次の歌をうたふ。

1.

Ich gedenke meiner Pflicht,
An dem Aeussersten der Erden,
Schoenste, die mir nicht kan werden,

Liebste, die mein Herze bricht

Der ich einen Eid geschworen

Sonder Arg und ohne Scheu

Bei dem Licht, da ich gehoren,

Zu verbleiben ewig treu.

2.

Ja, was sag ich, Pflicht und Schuld?

Was Versprechen und Beloben?

Deine Schoenheit, die von oben

Dir vergoent der Goetter Huld,

Deine Tugend, die man findet

Nirgend in der ganzen Welt

Ist die Kette, die mich bindet,

Ist der Kerker, der mich haelt.

3.

Ach zu meiner harten Zucht

Hab ich armer mich vermesssen,

Deiner, Engel! zu vergessen,

鎖 國

鎖 國

Durch so weite wueste Flueth.
Taur und Caucaus, Tuerk und Heiden
Noch der Ind-und Gangesflueth
Koennen mich von dir nicht scheiden,
Nicht vermindern meine Gluth.

4.

Grosser Kaiser, Himmels Sohn,
Herrscher dieser fernen Landen,
Reich von Gold und stark von Handen,
Ich beheure bei deinem Thron,
Dass ich alle diese Strahlen
Deines Reichthums, deiner Pracht,
Deiner Dames, die sich mahlen,
Nichts vor meinem Engel acht.

5.

Weg du Hof der Eitelkeit,
Weg du Land mit so viel Schatzen.
Zeitlich kam mich nichts ergoetzen,

Als die kensche Lieblichkeit
Meiner edlen Florimenen,
Meiner einzigen Begier,
Die wir uns so herzlich sehen,
Sie nach mich und seh nach ihr. (四)

これを自ら其徳を頌して「御先祖代々の善心美徳を承継で殊に寛仁に勝
れ又よく密に其國法を守り給ひ孔夫子の學に成長して域内を治め給ふこ
と國體民生の求む處に應ず」と云つた「チナヨス」(綱吉)の前で吟じたの
は随分太平樂なもので、今からは想像がつかかねる程の呑氣さである。
それが當代の北歐の學者の口から出たのだ。

次の參府は翌元祿五年の春であつた。謁見の日までに將軍が昌平坂の
文廟に御參りあつた事、柳澤出羽の邸に御成りあつた事、犬を始め生類
憐愍の嚴令などを耳にして日記に書留めた。三月六日が所謂入貢の蘭使

犬公方再
覽ル等ケ
すを上ベ

鎖 國

御覽の日である。年番の通詞は名家の本木庄太夫が随伴して来て任に當る。御前で演ずる痴態狂態は前年よりも更に盛であつて、男女接吻の眞似までして奥女中を笑はせる、愚にもつかぬ質問を連發されて閉口する。ケンペルが紀行の此條を讀むと、往古大和で蝦夷や隼人や國栖などの演戲をみそなはした當時をも偲ばしめ、太平の象と云はうか、優長の極と云はうか、評し様もない次第である。吾等をして野史氏となつて三王外記に附加へさせたなら、憲王の不善に更に「蕪蘭人」の一條を數へて置きたい。さてケンペル等は、三四日を隔て、登城して御暇乞をし、條約を讀聞かせられた。此際にも特に御覽があつて色々の蕪弄と質問に遭つたが、いくらか眞面目な分子が交らないでもなかつた。其一は奥醫師とかが、ケンペルに脈を執らせたり、身體醫療に關して質問をかけたたりして、彼我の問答があつた事である。是等の侍醫とは、或は去年六月長崎

ケンペル
と奥醫師

檢夫爾將
來書目

から召出された栗崎道有等の三人ではなかつたか。兎に角斯る遊戯が嵩じた極、着實な方に向いて來たのかとも思はれる。即ち元祿十一年には青木文藏が生れ、また同九年には桂川甫筑が侍醫といはつて、時運一轉の機を生じた。又ケンペルが第二に出會つたのは、御酒肴を下された後に、二舖の地圖であつた。一は歐洲の地圖の寫しであつて、國名や地名は記してないが、良く出来て居たといふ。他は日本製の世界全圖であつて片假名で記入してあつた。此機會に彼が日本の北邊蝦夷あたりの地理を窺つて參考にすることを得たのはせめてもの慰めであつた。

ケンペルが編纂した一種の異稱日本傳の資料及び出版の由來等については茲には略するが、彼が日本より幾多の書物を將來し、又或書物の解題を抄録した事は、シヨイヒツェルの緒言の末にも出て居る通りで、將來の書籍は、彼の手録と共に英國のスローン文庫に入つた事は、人の知る

が如くである。書目を見ると、無秩序ながら地圖道中記等の類より史籍本草書までを主とし、儒佛の書も一二は見える。訓蒙圖彙八卷とあるのは、寛文版の原書でなくて元禄八年版の増補本であるらしいのは變だ。大阪物語や島原記などの如き近代物が伊勢物語と共に舶載され、平家物語太平記徒然草百人一首などの、粗末な解題が手抄されて居る。殊に興味のあるのは、本朝櫻陰比事の名が見える事である。ケンペルの渡來は、西鶴の晩年に當る。二度目に參府して其夏に歸航した元禄五年には胸算用が出版された。櫻陰比事は其渡東の途にある元禄二年の刊行である。京都の所司代板倉周防守が退隱して櫻の樹陰で著はした政治書だなどと解説したのは、其助手か通詞の話しを聞かじつて居て間違へたのであらう。三浦梅園が、安永七年に長崎に遊び、當代最も名高い通詞の蘭學者なる吉雄耕牛の家で、ケンペルの日本史を見た際、本朝櫻陰比事の譯本

ケンペル
の櫻陰
比事

長崎通詞
の蘭學

がある由を歸山録に書いてあるが、是は恐らく誤であらう。——さてケンペルが鎖國の嚴密な最中に苦心して、資料を集め、見聞を勉めて、日本史を大成したのは、日本の蘭學開始の功績に比して決して劣らぬ事業である。本書の自序を讀むと、日々來る出島の役人や通詞を利用し、異國の酒を振舞つたり、天文算道を授けたりする代りに、彼等より種々の智識を得ることに骨折つた事がわかる。役人等の多くは、學識の足らぬ、智見の狭い人間であるから、到底十分な材料は得られない。然し年輩二十四五歳の明敏な一青年があつて、ケンペル渡來以後左右に侍して二回の參府にも從ひ懇篤に彼を助けて、彼に種々の報告や資料を供給したので、餘程便宜を得たらしい。此青年が何人であるかは知れないが、相當に和漢の學にも長じ、進んで新學に入るの勇もあつて、ケンペルからは天文物理及び外科を習ひ、又新に覺えた蘭語學は、讀み書き共に、他の

鎖國

通詞の及ぶ所ではなかつたと云ふ。斯くの如き熱心と前に述べた様な忍耐とを以て、鎖國時代の日本は研究されたのである。

鎖國の悲哀と滑稽は、其功過の論を外にして考へる餘地がある。元祿の盛期に遠西の學者を江戸城の大廣間に躍らせたり歌はせたりして歸した哀れと可笑しさとは譬へ様もない話である。將軍の近側にも江戸の市井にも京都にも大阪にも、あれほどの才人傑士が揃つて居て、あれ丈に文華が燦爛として、而も西眼に映する所があゝの位に止まつたのは悲しむべきであるが、それも時勢の罪で仕方がない。十數年の入違ひなくして白石がソーゲマンズの代りにケンペルに會つたなら如何な結果になつたかと想像して見たくなる。少しは大勢を動かしたかも知れぬ。遠くの佛蘭西でもモンテスキューが *L'esprit des lois* を著はして、ケンペルに據て日本の法律を論じ耶教禁制の原由を説いた頃は、本邦では漸く蘭書

を読むことが許された曉であつた。時代の相違は是非もない。

参照

- (一) (二) (三) 共に志筑忠雄の譯に由る。下段ケンペル日本史の引用文も故らに總て同人の鎖國論の譯文に従へり。
- (四) ドーム出版の獨逸原文の日本史に出づ。
- (五) 文化年中、馬場貞由、之を譯して東北雜誌諸國野作雜記といふ。

(大正二年二月)

沈鐘の傳説

沈鐘の傳説は我國の諸地方に随分多い。墨田川の鐘が淵にも或寺の鐘が沈んでゐるとは、既に江戸名所圖會にも見え、今も其邊の人で信じてゐる者もある。芭蕉の「月いづこ鐘は沈める海の底」の句で名高い越前の鐘が崎や、幽齋の紀行で夙に知れ渡つた筑前の鐘の岬は、常宮や志賀

月ひと沈める海の底
(芭蕉)

沈鐘の傳説
神社に今も存する實物の名鐘との關係は附けずとも、説話として興味は豊かである。然し、三井寺や道成寺の鐘から出た様な文學上の逸品は未だ此等の沈鐘傳説から生れぬ様だ。南谿の西遊記篇などでも人の知る如く、鐘は龍神の愛するもの故に、船に積んで海上をかよふと、必ず沈み、又沈んだ鐘を引上げようとするれば、龍神の怒に觸れて大風波が起ると信せられて、筑前の鐘の話も其一例となつてゐるが、若し假に龍神を我國土の神とし、鐘を異域の信仰たる佛教の象徴とし、又國土の海神が鐘の渡來を嫌ふといふ様に解したならば、此等の傳説が幸にして早くハウプトマンの様な作家の手に掛つた場合には一種のアレゴリーシユの名作と成り得たらうと思ふ。

筑前の鐘が岬は玄海灘に瀕して南韓と相對し、其南方には西方文明輸入の要津たる博多を控へ、一方には又宗像祠に接してゐる。而して宗像

神は天照大神が生みませる三女神である。又少し隔つては志賀の綿津見神社もあつて、後の住吉神で矢張三神を祭る。萬葉の古歌に「千早振る金のみさきを過ぎぬとも、吾は忘れず志賀のすめ神」とあるを、後人の附會にもせよ鐘岬と解して置いて、此海中の沈鐘をば宗像志賀の諸神の所爲とすることも出来よう。時代を佛教盛時の天平の頃に取るならば、萬葉集卷十六なる志賀白水郎が沖に出た儘歸らぬ夫を悲む歌なども一種の取材と成り得るであらう。「荒雄らがゆきにし日より志賀の海女の大浦田沼はさぶしからすや」と鑄物師ならぬ船人の妻マダを點出するも妙であらう。但し沈んだ鐘は、朝鮮人の鑄たものであつて、船に載せて運ぶ間に船子と共に沈没することとなるのである。現存する朝鮮の古鐘は近時考古學者の寫眞を蒐集したものを見ても分る様に、立派な藝術品として稱美するに足ることは言ふまでもなからう。

沈鐘の傳説

天草の亂があつて數年の後、この鐘岬附近の一小島に來た伴天連どもの黒船を見つけて有司に報じたのも宗像の社人であつたといふ。其時捕へられた南蠻人は後に改名して江戸の切支丹屋敷に幽囚された岡本三右衛門といふ名高い伊太利亞人である。これは鐘の沈んだ話とは違ふが、外教の渡來に抗する一種の神力の結果と見て、併せて構想に資したい感じがする。又桂川中良の桂林漫録を見ると、

孟子はいみじき書なれども、日本の神の御意に合はず、唐土より載來る舶有れば必覆へると云ふ事、古くより云傳へたる所なり、とあるが、五雜俎にも、

倭奴亦重儒書、云々、凡中國經書、皆以重價購之、獨無孟子云、有携其書往者、舟輒覆溺、此亦一奇事也、

と見え、神意の畏るべきことを言傳へてある、孟子の危險思想を含む爲

め、古へ清原家では御前講義で或章句を除いたことのあるは、京都帝國大學所藏の清家本慶長版孟子の書入にも見えるから、如斯き海上の遭難あるは當然かも知れぬ。國神が嫌ふ鐘が、渡來する途中で船から落ちて沈むのと同じわけと認められる。

時代後れにブレケツケッタスと谷蝦蟆の聲を擬ねた所で手柄にもならぬと云はばそれ迄であるが、秀郷とやらんが龍宮より鐘を取つて來たやうに、此の沈鐘の古傳説を文献中より拾ひ來つたならば、觀じ様に由つては、内外思潮の衝突する時勢のアレゴリーとも成り得ることは疑あるまい。(明治四十五年一月)

櫛の葉

昔より今に渡りくる黒船縁がつくれば鱈の餌となるさんたまりや(松の葉)

「日見の峠一の瀬と云所を過るほど、都てえしれぬ香鼻に入て胸心わろく、とへば是なん長崎のほひと申」と延寶の長崎土産に見える其異臭は、鎖國時代の日本人の鼻をいかほど強く刺戟したらうか、崎陽の俳人向井去來の花薄の句碑が建つ彼峠を越えて港に近づくと、百尺竿に翻る紅白旗に、先づ和蘭館はあすこそと心ときめき、新しい西學の智識を追求する若い人たちは多年夢みた扇形の出島が眼の前に展開されてどんな心地になつたらうか。巢林子の形容を茲に移せば「唐土阿蘭陀の代物を朝な夕なに引受て千艘出れば入船も日に千貫目萬貫目小判走れば銀が飛ぶ金色世界も斯やらん」といふ港の繁盛に引寄せられる商賈は云ふに

長崎のほひ

及ばず、新渡の唐本蘭書に胸躍らす學藝の士より遠國の珍禽異獸に悦喜する兒童に至るまで此浦から受けた感化の莫大であつて、近世の日本文化史上光輝ある功績を遺したことは茲に説くまでも無い。「聞てよき物—石火矢の音」と長崎土産にもあるが如く、其音に蘭船の入港を喜ぶ市民、「はやき物—阿蘭陀の歸帆」とある様に異人に別を惜む丸山の遊女、繻子天鵝絨の手ざはり、カステラの味、チンタ酒の香り、聖堂に乾隆帝の額を掲ぐれば、蘭館に北方流派の海洋畫を見る。帆柱を猿の如くさわたる黒奴、街頭に輕侮の的たる間の子、屋後に泥芥をあさる豚の鳴聲、紅毛の留守を守るさびしき女の愛づるカナリヤ、通詞の家に弄ぶオルゴールの音止みて、外からチャルメラの響耳をつく。……

危険思想よと宗門改めは、書物改めと共に此浦に厳しく、吉利支丹寺の鐘の音既に絶えて明倫堂に啞喏の聲高らかに、諏訪神社の花盛りは春

櫛の葉

長崎の地方色と文藝

權の業

毎に人の賑を増す時勢であつたから、異風殊俗の尙更際立つて土地の色
合益々鮮かに成來り、いはゆる長崎のほひ鎖國の民の鼻をつくばかり
であつたのは當然である。然るに此のほひを文學の上に傳へたのは、
地誌紀行記録の類をはじめ曆數食貨等の志類を除くと極めて少ない。當
代民心の趨向致し方がないとは云へ、文藝の士のふがひなさ、徒に此エ
キヅチツクな好題目を逸し去つたのは惜むべきことと思ふ。屏風繪に殘
る南蠻船紅毛船着津の景に長崎のほひを偲び得るが如く、近世の詩歌
俳句の中より若干の例を見出すことも敢て難事ではない。然し他の學藝
の徒が成遂げた業に比べれば、文藝上の作品の寥々たるは固より争はれ
ぬ。試に思出づる儘に其著しい二三を挙げれば、此土に遊んで歸つた後、
昆陽は蘭學の基を開き、鳩溪は奇器を工夫し、子平は北邊の國防を論じ、
江漢は洋畫の流派を弘め、皆紅毛人の啓發を受けた。崎陽の象胥家から

長崎と學
者

出た者では、支那小説流布の端を開いた岡島冠山、天文学に文法學に造
詣最も深かつた中野柳圃を數へ挙げよう。之に反して此土地に來住し或
は客遊した文學者、若くは此港から他方に移つた文學者で世に顯はれた
ものは甚だ少い。而して其顯はれた少數文士のうち長崎のほひを留め
た佳作を遺したものは更に少い。

蜀山人

權園

貞徳

三千風

これらの文人のうちで、和蘭芝居の梗概を書留めた南畝や、唐人芝居
を見物して長歌を詠んだ權園の如きは異數とすべきであらうが、瓊浦に
流寓した貞徳が「獅子野牛さてもかいたる油畫に」の附句を遺したのや、
貞享年中行脚して客遊した三千風が崎陽の風光を叙して「是に對すべき
は和朝の富士山の外はあらじとおぼふ……所詮長崎を見ずして京物語
はすまじかりける」とて、菊の日に「西都に菊あつてチンタの玉江壽け
り」の句を吐いたのも、ともに茲に舉げて置くの價があらう。貞門の俳

權の業

權の葉

人より談林一派乃至所謂阿蘭陀西鶴の輩に至るまで外來的の事物を挾むことが多くあつても、特筆する程の句もない。乾坤辨説の編者の子として父元升の學問の一面たる曆學に身を立てたこともある向井去來は長崎より出でて蕉門に名を成し蕉風を郷土に弘めたが、元と貞門の好奇談林の奔放とは違ふから、支考と共に丸山の賦を作り、ういなづまやこの傾城とかり枕の一句を添へた丈で、あたら崎陽特殊の風物も吟咏のたねとはならなかつた。況んや去來の性格では斯様な方向に進み得なかつた。蕉門で同郷の魯町卯七の輩以下の句に至つては七部集以外にあつては姑く博搜の士に俟たう。

去來の時代より正に百餘年の間、長崎が迎へた著名の洋人には、其初め元祿に獨逸のケンベル中頃明和に瑞典のツンベルグ、文化に魯國のクルゼンステルン(獨人)があつたが、文政の中程に至てシーボルトの來崎を

見んとするに先つて、前後して二人の詩人が瓊浦に遊寓して能く斯土の特色を諷詠の料に供したのは多とすべきである。一は山陽の西遊稿(文政元年)他は星巖の西征集(文政七年)である。前者の長崎謠十解、後者の瓊浦雜詠三十首、共に諷誦すべく、賴氏の校書袖笑に代つて清客江辛夷を憶ふの七絶は梁氏の女校書袖笑に贈るの一首と合せて朗吟すべきものであらう。彼が阻卻郎船故逢の結は松の葉の長崎節に、

こがれく〜て唐土舟の袖に湊のよる〜はそりや逢ふよる〜は袖に湊のよるばかりそりやあふ

の遺韻を偲ばしめる。吾等が少年の頃愛誦した山陽の中秋の詩の瓦光明滅海山影、旗色依稀吳越舟、長鉄短衣成久客、蠻煙蠻雨又中秋は西征集の十五夜泛舟於瓊浦賞月の詩に比べると明地に長崎のほひはするが、而も後者の載將水府珠千斛、買斷揚州月二分の佳句も氣に入つた。星巖

權の葉

權の葉

の鄭成功詩六絶句は外史氏の佛郎王歌一篇と對して詠史であるが、吾等は蠻醫に遭つてナポレオンのモスカウ敗績の戦況を聞いた事柄そのことを面白く感せずには居られない。

頼襄の荷蘭船行の長詩は、正に中島廣足の長歌、詠紅毛舶入貢歌一首（并に短歌）に必適する。中島權園はもと熊本藩士であつたが、致仕の後には専ら長崎に來往して國學を講じ歌道を教へ、語學及考證上の著述歌文の製作數多の書物となつて残つて居るが、歌人としてよりは語學者として顯はれ、語學者としても寧ろ補訂を事とした。玉霞窓の小篠、詞八衢補遺、増補雅言集覽等能く綿密に宣長春庭雅望等先進諸家の所説を補訂して後人を益すること多かつた。斯くて鎮西國學者の泰斗となつたが、身崎陽に在て蘭學の影響を受けず、固有の國語學の祖述者であつたのは稱揚すべきか惜歎すべきか。兎も角も空しく豊後白杵の神主の子に

權の葉

して少にして京畿に遊學した鶴峯戊申をして名を成さしめた。鶴峯氏が曆數に秀でた頭腦を有つて居た丈、蘭學に入り蘭文典をも解して遂に日本文典に應用して語學新書（天保二年刻）の名著を残すに至つたのであらうが、然し此著が幕末語學界に流星の如く一閃過したと云のみで如何ばかり日蘭兩國語の本質を明らかに居た上の著作であるかは問ふまでもない。ホフマンも身蘭國に居ながらにして、時後れて日本文典を編したが、あれだけの出來榮を海西翁の新書に見られるか、又此新書が權園翁の功績ほども後昆を益したか、自分は寧ろ之を疑ふ。然し論は畢竟蘭學に通ずべくして通じなかつた廣足の天分や年齢は別問題として戊申ほどの智識にては後代の國文典に寄與する所幾何も無かつたらうと云ふに落ちる。

山陽の詩才と廣足の歌才とを比較するの要は無いが、西遊稿と權園長歌集とに見える同じ題目の長詩を對照して優劣を論ずるは、要するに漢

榎の葉

詩國歌の得失を論ずることになり併せて當代漢國兩學家の西洋事物に對する感興及態度にも説及ぶ様になると思ふ。此最後の意味に於て、神主の家に生れた海西翁が蘭文典を學んだのを多とし、長崎に住して蘭學に通曉する機を捉へなかつた榎園翁を議すべきであらうが此點から云ふと伊勢の足代弘訓翁の如きは、時勢や土地や交友やも然らしめたに相違ないが、經世の志もあり對外の念もあつたので國學者中出色であつた。是も一つには中齋や拙堂の感化にも由つたことと想像される。嘉永年中黒澤翁滿が異人恐怖傳と題して志筑忠雄（中野柳圃）の檢夫爾の日本誌（鎖國論享和二年）を刻したことや安政年中横山由清が魯敏遜漂行紀略を譯出したことは、國學者の事業としては寧ろ奇しいがこれも時世である。されば獨り中島廣足を議すべきでは無いが、維新の際に後れを取り、明治の二十有餘年間サトウ、アストン、チャンパレンの三家をして功を成

さしめた責任は幕末の國學者にも既に相當の責任が歸しはしまいか。

再び榎園翁が好機を逸したことを述べて見たい。山陽は文政元年即ち西紀一八一八年、嘗てモスカウの役に従軍した軍醫からナポレオンの話を聞いて長詩を詠じた。十年の後（文政十一年）廣足は、その榎島浪風記にも書いた通り、長崎から船を發して郷里熊本に向ふ際に、暴風雨に遭つて難破したが其際シーボルトが國禁を犯して歐西へ持去らうとした日本地圖類を載せた阿蘭陀船も亦同じ天災にかかつた。其事は前記の浪風記にも「蒙古が船を吹やぶりしむかしの神風」の仕業とし、内外學者の疑獄一件を略叙してあるが、有名な事件であるから多くの人の知悉する所である。シーボルトは初渡の際に在ては、文政六年より此冤獄に至るまで前後數年長崎に在つて幾多の交友門人を得て、我國の地理歴史博物を研鑽して博く材料を求め、同時に醫藥動植の學を傳へて居たのであ

榎の葉

つた。其研究の結果の一端は早くも歐洲の學界に報告され現に遭厄の翌年一八二九年六月附長崎發の日本人種起源論の如きは、巴里の亞細亞協會で披露されてクラブロートの批評を受けたこともある。而して樺島浪風記に神風を頌した國學者は幾多の蘭學者とは違つて此著名な東洋學者に接する機會を捉へなかつたらしい。「詩を作り異を記して故郷に傳へん」とした外史氏の心掛と意氣とは此歌人には見ることが出来なかつた。因みに附加へて置くのは山陽にも矢張同様の遭難があつたので、船で瓊港より萬里泊舟天草洋を過ぎて熊本に向ふ頃、大風浪に遇つて殆ど覆没する所であつたので、島原に上陸して漁戸に宿し、五言の長詩を賦して其模様を誌した此詩は檀翁の和文よりも簡勁で印象が強い。

詠紅毛舶入貢歌と荷蘭船行とを比べると、五七の單調と序詞の冗漫は長歌の特質であるから止むを得ないとして兩方に取得がある。然し「高

船陽貢紅檀
行の歌毛園
荷と舶の
蘭山入詠

御座天の日嗣と天皇の神のみことのきこしをす」と出始めるのは、莊重の得はあつても古雅に過ぎて冗長の嫌あるを免れぬ。中程に至つて、初めて「水鳥のうかべるごとくたくぶすま白き帆かげの浪間よりあらはれるるを」と蘭船を點出したのは、單直に崎陽西南天水交、忽見空際點秋毫と説起したのよりも印象不鮮明である。望樓號砲一怒嗥、二十五堡弓脱發は「をちこちに火矢の音とよめ」よりも餘りに弱すぎる。然し末尾に憂國家一流の口吻で慨歎したのは「いやましに榮ゆるさと浦安の國ぶりしるく春花のにはふ大御代こゝろなきえみしがとももあふがざらめや」の悠々迫らざるに及ばない。而して檀園の長歌の叙事の方が細密であることは確かだ。諏訪神社の大宮司であつて中島翁と交りのあつた青木永章にも詠蠻舶入貢歌といふ長篇の歌があるが、前記の長歌よりも優つて居るやうに思ふ。反歌には永章の「あたらば我とりてむといさみ

青木永章

檀の葉

たつ新防人はをたちとるらし」に對して廣足の「外國のたえぬ貢にあめのした萬のたからみちたらしたり」とある。

檀園長歌集には尙「唐船をよめるうた」がある。「わがほれる墨も硯もかみ筆もさはにぞあるらし、いざ子どもはや引いれよそのからふねを」と結ぶ。其外「詠食火鳥歌」に珍禽をうたひ、「觀虎作歌」に韓國の虎ちふ神を詠じた。「觀清人戲場作歌」に三國志中の一曲の演戲を叙したのは、南畝の隨筆に見えたる蘭唐の曲の梗概と共に珍重すべきものである。短歌にも同様な題目を詠んだものが無いではあるまいが、檀園集中には茲に擧ぐるに足るべき作を見ない。瓊浦集には崎人某の正月元日紅毛館にて詠じた「えみしらも小旗たてそへ吾くにのよろづよいはふ春はきにけり」及び同某の蘭船をよんだ「つたひのぼる三の柱のふなこともなれし手わざはあやふげもなし」を始め數首の歌を擧げ得るに止まる。

別に文政六年九月檀園三十二歳のをり通辭猪股久蔭から頼まれて急に譯したといふ阿蘭陀國風詩二篇がある。之に由て翁と蘭人との關係は一段密になるわけであるが、譯詩あまりに自由で、和臭を帯び過ぎ、エキゾチックな香りが全く失せてしまつたのは遺憾である。斯様な材料を更に多く集め今一きは調べてみたらば、廣足と蘭學との間柄が段々好く知れて來るであらう。然し不知火考で蘭人の説を承けてボスポリユス（隣火）エレキテル（電氣）を引證し、或は蘭人西洋にて火星船中に飛入し物語、或は物の理を窮むる紅毛人すら造物者の所爲といふことを假定する所以を述べたのでも、翁が西學と全く無交渉でないことは分る。上村觀光氏所藏の、廣足より伴信友に與へた二通の書狀に由ても此邊の消息は分る。然し翁の對外感興は至て淺かつたらしく、又態度も研究的とは云へない。右二通の全文は他日別に掲載するとして、今必要ある部を摘む

檀の葉

榎の葉

と、一通は某年十一月二十五日附で、

長崎も當年は何もめづらしき事も無御座候唐夏船も不來いとさびしく冬船相待居候時節に御座候海外も静なるやうすに御座候

とある。海外の静穩とは鴉片の亂後の小康をいひ、弘化年中にかゝるか。他の一通も年は書いてない、七月十四日である。

(フランス) 異國評判通相違無御座候しかし御武備におそれ早々歸り候はこゝちよく覺候

とあるは弘化三年六月長崎に入港した三隻の佛船を指したので、其評判が中外經緯傳の著者の處へも聞えて居たものと見える。同じ書狀中次の一節が一番面白く、長崎の匂ひを放つ。

(昨年) 本國船(紅毛)の大將遊女の爲に髭剃無相違候副將よりよほどやかましくいはれ候由是より長崎にて女にのろき者を髭剃と申候扱

髭剃の夜の一曲(數曲ナルベシ)甚妙なりし由のぞき見いたし候もの
の嘶此比承申候

但し右括弧中の文句も原註の儘である。榎園の翁も粹人だつたと見える。
長崎の鳥は時知らぬとりて真夜中にうたうて〜君を戻す(松の葉)
(明治四十五年正月)

古渡りのゴブラン織

京都の祇園、大津の四宮、長濱の八幡等、洛中近畿の神社の祭禮に曳く山鉦の見送りに所謂ゴブラン織の古きがありて殊に人目を惹けり。これら西土の掛氈は、蝦夷蜀江の異錦、印度波斯の花絨と共に山車山棚を哀みて、昔は燦爛として鎖國時代の文化を綾どり、今は古色を帯びて異國情調の掬すべきもの少しとせず。こゝに掲ぐるものは、其一にして、大津上京町の所藏にかゝり、毎年九月十五日前記神社の祭典に曳く所の

古渡りのゴブラン織

山車の見送りに展せらる。圖の現はす所はトロヤ城落ちエーネアス其父を負うて奔竄せんとする光景にして、實にギルギリスがエーネアス物語第二篇（ドライデン英譯本九八〇行、シルレル獨譯文一二一節）に於て此の孝行の勇士をして自からデイドーの前に述べしめたる慘況を寫せるものなり。織成精巧を缺くと雖も構圖古拙愛すべき點なきにあらず、眞に滋賀の都の珍寶たり。今この掛氈の傳來を考ふるに、其町に藏する古文書によりて文化四年九月八日京都の三井本店より銀八貫六百目を以てこの「天竺織毛綴見送り一幅」を買入れたりと云ふ外、其の本邦渡來の時代に至つては織成の邦土及年代と共に確定し難し。若夫れ阿蘭陀船が遠西より舶載したる古渡りのゴブラン織に關する研究は、他日爾餘の所藏を博搜したる後を待ちて試みるべきものたり。こゝには唯攻究の端を開きて史興詩趣を喚起せんとすると共に、其標本の一としてこゝに掲

載することを得しめたる大津上京町内外の諸氏の好意を謝して以て小引とす。（大正二年九月）

南嶋を思ひて

——伊波文學士の「古琉球」に及ぶ——

今春琉球に關する一二の古本を讀んでから南嶋を思ふ情が切になり來たつた矢先に伊波君の「古琉球」と題する南國の色彩豊かな著述が而も其國の人の手に由つて贈られたのは異常に嬉しかった。

森島中良の「琉球談」中に見える年中行事（むしろ歳時記）を讀んだのは未だ寒い頃であつたかと思ふ、

○二月十二日、家々にて淺井し女子は井の水を汲んで顔を洗ふ、如此すれば疾病を免るるとなり、此月や土筆萌出、海棠・春菊・百合の花満開し蟋蟀鳴く。

南嶋を思ひて

南島を思ひて

○三月上巳の節句とて往來し、艾糕を作て餉る、石竹・薔薇・罌粟俱に花咲く、紫蘇生じ、麥秋り虹始て見ゆ。

○四月させる事なし、鐵線開き笋出、鯛鳴き、蚯蚓出、蝶鯛鳴き、芭蕉實を結ぶ、國人是を甘露と名づく。

此本の挿畫にも見るやうに髮の頂に簪を長く突出して島の女子が南音ゆるく蛇皮線を弾いてる側に熟しきつたバナナを食ひながら、芭蕉葉の扇を使つて懶氣に聽惚れてゐる若者を想像すると、徂徠が「琉球聘使記」に擧げたいとやなぎの唱歌が聞える。

こんな島へも昔し岡から支那の冊使を載せて來る船が通つたのみならず、十八九世紀の替り目からは西洋の探檢船が渡つて珍しい島物語を絶域に傳へることになつた。琉球語を初めて學問的に研究して世に著はしたバジル・ホール・チャンバレン Basil Hall Chamberlain 氏の祖父に當る

絲柳の唱

島物語

西人の琉球語彙

Captain Basil Hall の率ゐた英吉利船が歸航の途に聖ヘレナ島に立寄つて船長の口から流竄中の那翁に沖繩島の話を傳へた事は近時邦人の間にも普く知られる様になつたと思ふが、同じ航海で那覇港に來た英船アルセスト Alceste 號に就いての話は聞えぬらしい。

ライラ Lyra 號の艦長ホルルの航海記一八一七年、文には大尉クリップワード Clifford の編纂した琉球語彙が附録されてるが如く、アルセスト號乗組の軍醫マクレオッド Mac-Leod の航海記 同年同 にはフィッシュャー Fisher と呼ぶ人の蒐集した琉球語彙が添うてゐる。序に語彙の事を云へば、右諸船よりも二十年ばかり前にプロートン Captain Broughton の率ゐて我國の近海に來た英船の北太平洋探檢記 一八〇四年文にも附録として矢張琉球語彙が載つてゐる。後に至つて、探檢時代から布教時代に進んでベッテルハイム Bettelheim やギュンツラフ Günzlaff 等の宣教師連の手を

南島を思ひて

南島を思ひて

着けた琉球語學のことは姑く措き、以上三人の船乗共が集めた語彙は今日から見れば不完全で研究の資料にもならぬが、就中プロートンのは僅僅二十一語を録するに止まり、フィッシャーのは百八語を算するが、クリッフォードの分は一千の語辭と百十六の文章と琉球日本蝦夷三語對照表との三部より成立つ比較的詳密なものである。——然し今自分の傳へたいと思ふのは實に、既に無用に属した是等語彙の事ではないので、上に述べた英船の一なるアルセスト號の諸員が琉球で受けた印象ともいふべき一節であつたのである。

天保三年杏花園の藏版で出た「琉球雜話」の一節を見ると、

諸厄利亞の人、紀行の書を見るに千八百十六年〔文化十三丙子〕九月琉球國にいたりし條に〔中略〕また云、アルセスト〔船の名〕の船吏の長の婦おほく陸にありしに、此島の官人等のめぐみをうけしに、ある日貴人來りて、おほいなる家をよくかざり、諸器を設けられ

南島を思ひて

くべしといへり。ある日また貴人船中へ來りし時、かの婦人に對し、はなばだ丁寧なるやうにて、扇をあたへしが、その後たつき一女、好事にて諸厄利亞の婦を見んとて、かの婦ひとりたりし處へきたり、かの婦を四方より穴のあくほど見たりしが、かの扇をもちゐたりしゆゑか、いかにも妬情をふくみし眼の色にて、やゝひさしく見てぞかへりけり。さきに扇をあたへし貴人は國王にての、われ開帆の期すでにさだまりて九月二十六日琉球人祭服して寺におもむき犠牲を神に供し諸厄利亞人を加護し、つゝがなく本國へかへらしめんことをいひのれり。すでにひらけしほかのくにの、いつはりてなすとこのの別離の情よりは、よく心にてつしてかなしかりき。此質朴の善心よりいづる所なればなり。祈をばりて別をなさんとて、わが船にきそひ來りぬ。無情のボナハルテの名なりとも、いかでかこれにかんぜざらんや、わが船すでにさりし後、ひさしく船中より手をあげて其情をしらしめり。われすでに南方へむかひおもむきしに順風にてたちち此島はみえずなりにけり。しかれども此土俗の深切と情の厚きは、わが諸人の心にふかくかんじ恩としたふとむなり、云々。

南島を思ひて

主張あり問題の提供ある所もあるが、要するに南島の神話傳説を探り、童謡俚諺を尋ね、或は古音舊辭を究め、歌詞樂舞を傳へて、古史研究に文獻學に少からぬ寄與をされた功は特筆せねばなるまいと思ふ。

巻頭の「琉球人の祖先に就いて」の一篇は既に單行本「琉球人種論」で世の知る所であらうが、今幾多の趣味深き文章中より自分の感興に觸れた二三のものを擧げると、假名書きの金石文にあらはれた倭寇史料や同じ書體で記された所謂琉球最後の碑文にあらはれたる内裏言葉は（一は既に早くおなじ人によつて紹介されたものではあるが）古雅掬するに足る。「おもろざうし」は夙に著者の先輩田島利三郎が傳へて東都の雜誌上に其一部を披露し又其多數は東京文科大學の國語研究室の一隅に十年餘りこのかた所藏されて居たが、其詩味史興共に之を闡明する學者も無かつたところ、本篇の中で伊波君が着々研鑽に従はれて居るのを見るに愉

おもろ

快に堪へない。本土との交通史料として引かれた「おもろ」の一節に

楠の木はこので

大和船こので

やまと旅のぼて

山城たび登て

瓦買ひにのぼて

てもつ買ひにのぼて

とあるが如きは、古詩を讀むやうな感起させる。「可憐なる八重山乙女」が白明井のほとりで歌ふ絶唱、宮古島の名もない詩人が八重山をとめを歌うた長い鄙歌、共に之を誦すれば、愈々南島の空がなつかしくなる。八重山島の「鷺の鳥の歌」の雄渾なる風姿は南國の高調ともいふべきか。

鷺の歌

大おここの根さしに

なりあここの本ばいに

南島を思ひて

南島を思ひて

- 一の枝ふみのほり
- 七の枝ふみのほり
- 一びらい葉ばかけ
- 七びらい葉ばかけ
- 一びらい卵が産し
- 七びらいこがなし

と二十二句から成る頌歌である。

八重山宮古の島々は獨り歌謠のきはだつて居るばかりでなく、極南界にあつて其言語音韻も純古にして北の島嶼とは趣を異にする。康熙末年の中山傳信録の類亦三十六島の方言差別をまゝ記入してはあるが、断片的に過ぎぬ。十九世紀の初頭アーデルング等の言語集第一卷にも八重山及太平山（宮古）二島の方言について一言するは、歐西探検家及地理學者等の所説に基いたものらしいが、極めて曖昧なるを免れぬ。最近代我

八重山宮古の方言

國に於て一二内外の學徒の先島方言の古音を保存することを述べたのも極めて断片的に止まつた。伊波君の琉球語の掛結を論じ、波行古音Pたるの考に一步を進めたのも、主として極南諸島の言語調査の結果から來て居る。

二島の土人が沖繩本島の國頭地方の住民と共に花をバナ、葉をバー、羽をパニ、帆をプーと發音すること、此等の或地方にては大をウヅ（本島ではウフ、國語のオホ）といひ、吸ふをスブエンといふことが、波行古音考に有力なる證據を供したのみならず、二島の中にもPばかりが行はれず、既にFをも或場合には發音してゐること、又首里大島の如く本土の文化に接して開けた地方にては、FとHが、並び行はれること等は、言語變遷史上の一縮圖として極めて面白い事實である。PからFへ、FからHへと國語が此二千年間に進んだものが、現在南島に縮寫されて

南島を思ひて

波行音考資料

南島を思ひて

居ることは、伊波君の記述によつても益明かになり來つた。著者は更に進んで中山傳信録に收めてある琉球の單語を捉へて其波行音の文字に H P 三音があらはされて居ることを述べて、沖繩に於ける波行音變遷の過程の一端を示された。尤も右の琉球語彙は冊封副使の徐葆光が康熙五十八九年（享保四、五年）即西曆一七一九、二〇年在琉中に自ら蒐集したものではなく、康熙二年（寛文三年）即一六六三年に渡航した冊使張學禮の雜記中に收めた單語を基礎としたことは傳信録卷六琉球語の緒言に書いてある通りである。之より先き明の萬曆三十年（慶長七年）即一六〇二年の冊使夏子陽の使録（刻本）には、琉語が載つてあつた。更に遡つて嘉靖十三年（天文三年）即一五三四年の使節陳侃の記には卷末に夷語夷字を附録したとあるからは、琉球語彙が集められたに違ひないが徐氏の時代所傳の鈔本には闕けてしまひ、我邦に傳はつて、白石の南島

志の資料にも成つた使琉球録は矢張これを缺いて居たことと思ふ。明朝の陳夏兩使の蒐集も徐使の訂正して載せた清朝の張使の蒐集も共に訛謬甚しきものであつて、正確な材料とは云はれぬけれど、琉語の古史料の乏しきをりから、十分なる注意を以て之を利用するは適當と思ふ。寫音した蒐集者が閩人であるか北人であるかに由て其琉語の讀方も大に異なるわけであるが、語頭音たる唇音の場合には割に都合よく其音價を定め得る。伊波君が之を波行音變遷史料に應用されたのは結構である。唯陳夏二使の分があつたら一層 P 音資料に力を添へたらうと思ふばかりである。然るに明の周鐘等が編した音韻字海に附録する夷語音釋といふものがある。原書は明版もあり、音釋以下は異稱日本傳にも收められてある。夷語音釋の次に夷字音釋があつて、後者の末には劉孔當といふ名で昔年閩に遊んで琉球の通事に就いて知つたと附記してある。福州の南臺に南島を思ひて

南島を思ひて

琉球館があつて此處に通事が常置してもあつたことは言ふまでもない。夷語音釋の方には琉球とは斷つてないが、收めてある言語から推定して矢張琉球語たることは疑ない。時代は不明であるが、多分萬曆の初年度よりは下るまいと思ふ。傳信録に見えた陳侃の記の附録夷語夷字とあるは、或はこの音韻字海の附録の夷語夷字であつて、劉孔當は閩の通事に就いて此の音釋を施し若くは訂したと云ふ様に見られまいか。或は又劉孔當などの編したものを陳侃の使録に添へたものか。但し夷字は既に伴信友が假字本末の末に於て述べたとほり、元の陶宗儀の書史會要卷八に所載の文字について訂正を加へたものらしい事は推定し得る。松下見林は上の所謂夷語を單に日本語として、薛氏の日本寄語等所録の邦語と、異同表裏は別として、同様に取扱つたが、これは疑問であらう。兩方の關係は今深く論せぬが、二者は材料として之を區別して置きたいと思

夷語夷字の出典

ふ。さて今夷語音釋を、よしや嘉靖の初にまで引上げずとも、萬曆の初、即ち十六世紀の末期のものとして考へると、之を琉語史料として見る上に於て、興味ある事柄が見出されるのである。

附記。クラブロートは一八一〇年文化七年亞細亞文學歴史言語録事 Archiv für Asiatische Literatur, Geschichte und Sprachkunde 卷一に於て夷

語音釋を示せり。其由少アードルグの増補本言語集四に見ゆ。

今數語の例を擧げると、夷語音釋に波世(星)抛拿(鼻)品其(鬚)とある

を、傳信録には夫矢(星)谿納(鼻)非儿(鬚)とあるが、前者の波、抛、品

みなPであるのに、後者の夫、非はFで谿はHであるのに先づ注意され

る。其他兩者共にFたるが多く、稀にPたるを存するが、面白く思ふの

は、前者に花を法拿としてあるを後者に谿那とするが如きを始とし、春

のハを一は法として他は哈としたり、八月の八を一は法として他は哈と

南島を思ひて

PF二音の變遷

FH二音の變遷

南島を思ひて

した様な類のF Hの對照が認められる。福州方言に於ても法の字はF、他の字はHの頭音を有することは勿論だ。

斯くの如く嘉靖又は萬曆の初年と康熙の初年との間、殆ど百年乃至五十年のうちにも髣髴として如此の音韻變化の迹がたどられる。されば追々地方的及び時代的の差別が明かに成來つて琉球語の研究が經緯されるに至ると、我本土の國語の源流を究める上に大なる裨益をなすことは疑ない。言語以外の方面に於ても普く文獻の蒐集攻究を力められると同時に、國語學の上にも益々新資料を供給されることを自分は著者に熱望して止まないものである。

此著述は那覇の沖繩公論社の印刷及發行にかかり、印刷紙質裝釘の躰裁は立派なものとは云へず、活字の墨付が悪くて讀みにくい點もあるが自分は、却つて斯る質朴なる外見に一種の感興を禁じ得なかつた。タイトルページの横文の如きも、後年になつたら琉球木活字版とでも名けて却て珍重する人がないではなからう。とにかく南島から贈られた此新著に對し、あらゆる點に於て少からぬ注意と興味とを起したと云ふことを以て、この蕪稿を終る。

參照

- (一) 外題に琉球年代記と標し、合せて東條琴臺の序文あり、何人の著なりやを知らず。元太田南畝の所藏寫本なりしを門人の出版せるものにかゝる。文政年中の編述たることは疑なし。
- (二) 此航海記は初め一八一七年(文化十四年)倫敦に刊行し、翌年再版し、八年後更に版を加ふ。一八一八年(文政元年)の蘭譯本及佛譯本あり。本邦にて一節抄譯せられしは蓋し蘭本(アムステルダム版)によりしならん。尙バジエーの書目第四七三號及びウエンクスナルン書目三〇九頁を看るべし。
- (三)(四) 叢書說鈴第六冊に收むる所の張氏の使琉球紀略に語言二十餘箇を摘録せる

南島を思ひて

日本一と日本晴

を見るに大を倭捕殺(ウフサ)とせり。捕は支那各地皆Pに發音せり。又飯を安班とせるは、或は粟(アハ)にあらざるか。然らばアバと音ぜしなるべし。

(五) 續説郭第十一号所收の陳侃の琉球使略は極めて簡略なるものにて、僅に全文の一部たるに過ぎず。

(六) 新井白石の琉球國事略、島津重豪及び赤崎楨幹の琉客談記などを見ても知らるゝなり。

(追加)

初めて音譯を施し、年代は不明なれども地名にP音の稱呼を有する文字多かり。

烏巴麻、巴度麻、巴梯呂麻などの巴、那霸の霸の如き然り。是等と共に古く大島を烏父世麻と音譯せるも亦上に掲げし大をエゴとよむ例の一に加へつべし。

(明治四十五年七月)

日本一と日本晴

時代語

いつの時代にも一種の流行語といふものがあつて其時代の反映を成し

御伽話

て居る。吾等が幼き耳に慈母から聞いたお伽話の中にある日本一の黍團子や日本一の花咲爺などいふ場合に使はれた日本一の語も其起源を探つて見るとやはり一時代の流行語として廣く用ゐられた語で、確かに其の時代の國民精神を表現してをるのである。尤も日本一などいふ褒め詞はいかなる時代にでも誰れでも自らこしらへて使ひ得られる詞には相違ないけれども、それが一時代に非常に流行して居るのを見て、吾々は其當時の國民の思潮がいかに高まり、上下の元氣がいかに壮んであつたらうと想像されるのである。日本一といふ形容語は足利時代より徳川時代の初期へかけてのはやりことばと自分は認めるが、其以前にも用ゐられなかつたのではない。優にやさしき平安朝の宮廷裡の婦人ではへきかぬ氣のものであると、「すべて人には一に思はれずばさらに何にかせん、二三にては死ぬともあらず、一にてをあらん」などいふ位の見

日本一と日本晴

日本一と日本晴

識があつたのだから、日本一といふほどの考へがないわけはあるまい。濱松中納言物語、大鏡などはもはや日本一、日本第一といふ賞美語がいづれも二ヶ處ほどに見える。又下つて鎌倉時代になると、平治物語や平家物語の如き軍記物には日本一の不覺人とか、日本一の剛の者とかいふ文句があり、當時代の初期の文書にも日本第一の天狗などと出てくるので、段々廣く用ゐられて來たやうである。然し、足利時代になると、この俗語は益々頻繁に用ゐられ、又其意味も頗る擴張されてをるのである。曾我物語(四)には「日本一のふかく人」といふ句で出てをるが義經記になると、一、二、五、六、等の卷々に都合數ヶ處に見えてをり、例へば、靜御前を讚美して「舞にをいては日本一にて候」といひ、「日本一といふ宣言を給りけると承候し」といひ、又常盤御前の容色の美しきは「日本一の美人也」などと稱へるやうに最上級の讚美語としてあちこちに

使はれてをる。謡曲などに、「日本一の御機嫌にて候ふ」(小袖曾我)、「これこそ日本一の事にて候ふ賜はり候へ」(鉢木)、「日本一烏帽子が似合ひ申して候ふ」(烏帽子折)などの使ひざまになるといかにこの語が流行したかがわかり、從て意味が大分擴がつて來たことが知れる。丁度同じ頃であらう、御伽話に黍團子をほめても日本一といひ、花咲爺をほめても日本一といひ、むやみにこの語を使つてをる。謡曲で用ゐる以上は、狂言の上にあるのは當然の話で、「日本一の下手」といひ、「日本一の大ふ」などに見える。要するに足利時代は國民の元氣の大に勃興した時代である。韓國や支那の沿岸を荒らしまはつて、所謂倭寇を試みた時代である。高麗及朝鮮との交際や明との交通も盛んであつた時代である。末期になると、西洋や南洋との交通も開けたし、對外精神の發展は遂に征韓の擧を起さしめるやうになつたのである。かくの如く外に向つて大に

日本一と日本晴

日本一と日本晴

膨脹し侵略し飛躍せんとするの元氣を持つて居た當時の我國民は内に在つては常に覇者たらんとする氣概を有し、清女のいはゆる「一に思はれずば、更に何にかせん」の意氣を持ち、日本一、天下一、三國一たらんする心掛があつたものと思はれる。徳川時代の初期凡數十年といふものは時代思潮の上からいへば、やはり戰國時代思潮の繼續である。日本近世史の著者は近世を元和二年以後としたと思つてゐるが、或意味からいふと、更に繰下げて天草亂後、徳川氏が鎖國政策を執るに至つた寛永十六年あたりまでを前代と一つらに見てしまつて差支あるまいと思ふ。徳川時代は鎖國時代、封建割據時代である。國民精神の萎靡時代である。立派な覇者が唯一人江戸に構へて御座つた時代である。この征夷大將軍が即ち天下一であり、日本一であつたのである。當代の民衆は將軍の威光に謳歌しつゝ、「日光を見ないうちに結構といふな」といつた。日本一

の代りに寧ろ日光一といふ語でも出來さうなものであつたと思ふ。さて徳川氏の初期に日本一の語が流行つたことは、葡萄牙人のかいた日本文典の中に、形容詞の最上級として此語を天下一といふ語と共に擧げて「彼奴は日本一大けなげ者ぢや」「天下一の學者である」などの例を示してゐるのでも知れよう。當時流行の俳諧でも、月花を賞めるには猶往々この語を用ゐ、「唐までも日本一の月夜かな」「重頼」「名木の花ぞ日本一の谷」「常春」、甚しきに至つては、談林の句に、「色好みあつばれそなたは日本一」「松意」などとやつてをる。かの『醒睡笑』にもやれ「日本一の鈍なる弟子」とか、「われは日本一の事をたくみ出したは」とか、「紙は日本一の播磨杉原」とか見えるので、一般の事が推される。

さて足利時代には、獨り、日本一のみならず、すべて「何々一」といふことがはやつたもので、坂東一、西國一、中國一、西塔一、門前一、

日本一と日本晴

尙進んでは天下一、三國一等の語がある。天下第一の稱は既に漢籍にも見えてをるのであるが、我が足利時代中葉の抄本にも見え、以後の軍記及俗文學には非常に多く使はれてをる稱號である。この稱は大抵藝術界の優勝者、即ちチャンピオンといふやうな意味で、一種の尊稱である。即ち天下一號といつて、信長記にも「天下一號を取者何れの道にても大切なる事なり」として一藝一道のチャンピオンに向つて與へた美稱である。即ち「天下一の大鼓打」、「太鼓の天下一」（甲陽軍鑑）、「天下一の藝者」、（信長記）などとして、戰國以來天下に覇たらんとするもの輩出したによつて出て來た流行語である。所が随分濫用されはじめたものと見えて、信長記に「天下一は唯一人有てこそ一號にて有べけれ二人有る事は猥なるに」とある。徳川氏以後に至つても其遺風があつて、弓術の優勝者が天下一の名を博したことは、大日本史料慶長十一年及十二年の條に見える。

承應三年甲午に女院御所より天下一美號不苦とあり云々（境鑑）など、あつて、壺燒鹽にまで用ゐられ、能役者、目醫者、まじなひも、この號賦與せられ（醒睡笑）、看板、暖簾、商品等にまでこの號を記した、（信長記、見聞集、色音論、奈良名所記等）従て俳諧にこの名の甚多く見え、月花を愛づるにも、やたらに天下一天下一といつたものである。かくの如く流行した結果、あまり濫用も濫用し過ぎたので、遂に天和二年に器物に天下一の字を記すことを禁せられた。一體時代からいへば天下一の將軍の下に、むやみに天下一などと稱するのは不都合の至りなのであらう。天和二年といへば元祿の少し前で、はや大分徳川時代の風潮が、つて來た。これで全くすたれたのではないが、戰國時代に流行しはじめた語が太平の時代に衰へるのも、言語の運命上然るべき話だ。

天下一に次いで、三國一といふ語が、やはり同時代に流行つたもの

日本一と日本晴

日本一と日本晴

である。これも、始めは廣く用ゐられた稱美語であるが、月雪花を愛で、美人をほめたりする外、最も多くは嫁入や婿取の場合の祝辭に用ゐられた。狂言に花子の姿の美なるを稱へて「天竺震旦我朝三國一ちやよの」といひ、秀句好きなるを「唐土天竺我朝三國に隠れがおりない」と形容したり、「老僧のはたらき三國一」(醒睡笑)など、いつたりする。後世は嫁入婿取か、さもなくば甘酒屋の看板に名残を留めてあつて、現今も、天下第一、日本一などの美稱と共に國産物などには記してあるのを折々見つけるが、まづこゝらが結末であらう。三國といへば昔は日本、支那、印度(朝鮮は一國とは已に見做されなかつた)であつたものが、今は露佛獨とか日英米とかいふ工合に變つたのだから、右のやうな始末になるも、あたりまへの話である。

日本一を始め、右の語はみな足利時代(戰國時代から徳川時代の初期

までをこめて)の流行語であつたが、時勢の變遷と共に段々すたれてしまつた。まあ之からは世界一といふ語か、さもなくば「日本で第一」といふ意味でなく、「日本が第一」といふ意味で、日本一といふ語をはやらせねばなるまいか。

因みに述べておきたいのは、日本晴といふ語がやはり足利時代の語らしいので、當時海上生活に慣れて、氣宇雄大であつた國民の思想界より生れたものであらう。この語は僧文之の南浦文集(慶長十四年)と、松江重頼の犬子集(寛永十年)とで見た外、其以前の書物には未だみかけぬが、どうも鎖國民の生んだものでなくして、海國民の作つたものらしく考へられるのである。稍後れては友雪の編した兩吟一日千句(延寶七年)に西鶴の「山科も日本晴となりにけり」といふ句が見えて居る。「待てば海路の日和あり」の諺と共に、海上生活から出來た語であらう。日露戰

倭寇時代の俗謡

争によりて吾々は東郷日和、大山時雨、小村日和などの語を明治當代の天象語彙の中に見出すの光榮を有するが、其等の語よりも日本晴の語の方が、どんなによいか知れない。(明治三十九年四月)

倭寇時代の俗謡

近年我國の詩界に古い俗謡ぶりの調が導き入れられた事は何人も知る所であらう。是れ一には故栗田、大和田兩氏の古謡の結集歌謡の類聚に次いで松の葉、松の落葉の如き名著が翻刻され、又其等俗曲の評釋も現はれたが爲で、近頃は同じ機運に伴うて更に大永年中の閑吟集や寛文頃の刻本當世小唄揃(藝文大正元年八月號所載)などの遺篇も世に出て普く讀詩界に愛誦さるゝに至つた。茲に明の末に侯繼國といふ者が著はした全浙兵制の附録として日本風土記の中に、凡そ戰國時代より桃山時代

俗謡調の詩

日本風土記

山歌

に及ぶ頃の俗謡が十二首載つて居るのは、極めて珍とすべきであるが、延寶の昔明版の同書が長崎に傳はつて以來、傳寫抄録引證する者は随分あつたにも拘はらず、特に其俚謡に就て注意する人は少かつた様に見える。既に聞えてゐる名品例へば隆達や松の葉などの小唄に對して遜色のない作といふ程でないが、又棄て難い節もあるので本誌の一隅を借りて、此こぼれ松葉ともいふべき十二首中より、誦するに足るべき數首を拾上げて示さうと思ふ。本書に關する考證は茲に略するが、其の成立を見るに日本の風土を記す外、文字言語和歌の一斑を擧げ、明に遊んだ邦人の拙い詩賦を載せ、其次に山歌と題して俚謡を掲げた次第である。山歌とは琵琶行の末の方に、豈に山歌と村笛と無からんやともあるが如く鄙歌の意であらう。歌は皆萬葉假名風に字音のみで書いてあり、浙江邊の發音で讀ませている。釋音と標して語句の解釋を施し、切意と題して全體

倭寇時代の俗謡

倭寇時代の俗謡

の大意を譯してある。元來此風土記は何人の編纂か分らぬけれど、倭寇時代の末期に方つて、前々から日本の事物に注意し來つた餘り、幾分かは前出の書に採り、多くは當代の倭人の口から聞いて筆録したもので、山歌の一篇は壯快なる八幡船、殺伐なる海賊船が浙江の沿海に残した美しい遺影とも見られる。

集中の絶唱と云ふべきは、
接夫歸妻

十二の山歌中、戰國時代の面影があつて、集中の絶唱とも云ふべきは、夫歸妻接の一首であらう。

いとしの殿や、おいとしの殿や、とまれ弓肩よ、箭筒は戴かうに。夫の歸り遅しと待侘ぶる武士の妻が、之を迎ふる情趣溢るゝばかりである。とまれ弓肩よの一句が殊に躍動する感がある。月夜私情には、

十五夜の月は宵々曇れ、曉さえよ、殿御もどそよの。
と云ふのがあるが次なる少女別郎の

十七八と寢て離るゝは、たい萍の水ばなれよの。

と同趣である。青春嘆世の一首は青年時代の謳歌である。

十七八に二度そろか枯木に花が咲き候かよの。

最後の女嘆配遅は綠葉嘆を謠つたもので、其調が奇古である。

暇をくれもせで、川舟よの、綱うちかけて、いつまで。

雜唱小曲の一つには、隆達の小唄の中に見えて居るものがある。

峯の松山さゝら浪は越ゆとも御身と我等は千代を経るまで。

隆達節として傳はる歌とは聊か文句の末々が違ふ。それには、

末の松山さゝなみは越すとも、御身と我とは千代をふるまで。

と成つて居る。以下の六首に至つては、價值も下り、又文字の錯誤もあるらしく、讀み難い所もある。別に憶中華調と題して直譯風に而も片言交りて、我西國訛を加へて作つた拙劣な散文詩様なものがある。西湖の

倭寇時代の俗謡

雜唱小曲
と隆達節

憶中華調

好景を「西池、好か景」といひ、日本中に無しとの意を「無うおんじやろ、日本中」といつたのは、滑稽であるが、言語の上から見ると面白い。

傳ふべきものは此丈に過ぎないが、吾等は歌の分量や價值から特に之を擧げる次第ではなく、又諸々の結集に洩れたから之を補ふと云ふよりも、寧ろ其傳來の點から見て興味が深い爲である。是等の隆達時代の小唄は倭寇に伴うて浙江邊の住民に傳はつたといふ事は日本の歌謡史上に特筆すべき所である。抑も倭寇時代は國民の雄飛時代であつて、上は蒙古撃退の壯舉を承け、下は明韓經略の計畫に接する、東風に乗じて浙江を侵し南下して兩廣を襲うた八幡船は御朱印時代の角倉船や末吉船の水先案内であつた。然し頭に立派な統率者が無かつたから萬骨徒に枯れて、功名を成した一將もなく、可惜叙事詩の好題目を逸し去つた。桃太郎の鬼ヶ島征伐も七福神の寶船も此時代の風潮に乗じて産れた説話だといふ

が、是等の御伽噺が倭寇が遺した文學的産物であるとするれば、甚だ情ない次第である。徳川時代の漂流譚からロビンソン物語が出なかつた様に、當代にも倭寇を歌つたカモエンスも現はれなかつた。明治の聖世は終に是等の海賊を題材に使ふバイロンの出る機會をも失つて仕舞つたのである。海賊船と云ふ好題材に隆達節を配した所で、「雄飛する日本人」といふ名曲が直に出来るわけではないが、上に掲げた小唄は倭寇といふ背景を得て讀誦して益々興を催すのである。對馬海峽の功名は千古に朽ちまいが、我國の水師提督は幸にもハミルトン夫人との間に艶聞を流す者もない代りに、不幸にも詩人スキンバートを生んで海洋詩の絶唱を聞かせてくれる者もない。倭寇も小唄も昔の夢である。(大正元年十月)

足利時代に於ける日本と南國との關係

一

天文十二年歐人初渡以後に於て日本と南方諸國との關係は次第に頻繁複雑に赴き、更に秀吉家康の時代に及んで彼我の往來交渉は激甚多様を極め、その餘勢は鎖國の後に至つても止まず尙直接に又間接に商業其他種々の關係が絶えなかつた事は、之を前代に比して史料も豊富なるだけ世間に將た學界に廣く知れわたつて居る。それ以前我國と南土との關係如何についても既に二三の史家の研究が現はれてはあるが、未だ盡くさざる所も多く見えるに因り予輩は人心南に向ふ當今の時勢を機として聊

日本と南國との關係

日本と南國との關係

か本問題の調査に向つて増補すべき資料を供し大方の注意を喚起すると同時に學者の示教を乞うて見たいと思ふのである。蓋し元寇以後殆ど百年、逆しまに支那への倭寇漸く甚しきを加ふる頃、我にあつては足利義滿將軍の職に就き進取的對外策を執り、彼にあつては明太祖同時に位に即き國を建て蠻夷の入貢盛んなること前諸代に越え、彼我兩國の時運は相觸れ相俟つて日東と南蕃との間の接觸が開始されたものと考へられるのである。一方には義滿就職の初め應安元年洪武僧絶海の僧汝霖と共に入明の魁をなすあり、他方には太祖即位後程なく我國に使を派することと兩回、征西將軍と信書の往復を開き、尋で洪武六年應安三たび使を我國に遣はし初て好を幕府に通じて寇掠を禁止貿易を勸めんことを求むるあり、茲に日明の外交は端を發いた。斯くて應安以降應永十五年に至る義滿の在世四十餘年間は即ち洪武を経て永樂の初め成祖が鄭和等を派遣

して南海諸國を歴巡せしめ威を輝かせ來貢通商の益繁盛に進む時代に該當し、その頃南蕃の支那以東に渡來するもの相次ぐ様になり、同時に殊に元寇以來勃々たる士氣英發せる民心は、或は海寇となり或は海商となり次第に南進して支那疆域の内外に於て南蕃人と相觸るゝの機運を作つた。西紀十四世紀の後期より十五世紀の初旬に互りて約半世紀を包含する右の時代は、内には南北兩朝の合一に次いで、義滿が辭職して義持が將軍となるが如き交替が起つたけれども其實外交の方針に變更ある筈もなく、鹿苑前將軍の勝定新將軍に對するは徳川氏初代に東照公の台徳公に對すると同様だとも考へられるし、又外には恰も南帝より北主に神器を傳へたと同年に高麗が亡びて李成桂が朝鮮國王と稱した様な革新あり次で當時分裂鬭争に陥つて居た琉球が應永二十九年十年中山王に一統さるゝあり、即ち島帝國を中心として半島新王國と、南島小王國と極東

日本と南國との關係

日本と南國との關係

三邦はそれぞれ一新時期を劃して明に來往する南西諸蕃と相觸接する運命に際會した次第である。されば予輩は足利義滿及び明太祖の政權を執つた應安洪武の初年即ち西紀一三六八年より我にあつては新南蠻たる葡萄牙人の渡來した天文十二年、彼にあつては王直が倭寇と滿刺加佛郎機等の西南夷とを誘引して海寇が猖獗を極め始むる頃の嘉靖二十一年、西紀一五四三年に至る凡百七十五年間に於る日本と南土との關係を考察して見ようと思ふのである。

二

今本論に入るに先ちて右の時期以前南國との關係を瞥見して置く。奈良朝及び其前後各二百年即ち西紀七世紀の中葉より九世紀の半に至る約二百五十年間國史に散見する事實に徴するに遣唐の朝臣入唐の學僧渡唐

の商賈が國都に海港に南蠻西域の人と相接した事は云ふに及ばず、既に存する一二の實例を擧ぐるまでもなく事理上推知される。又日本と印度支那半島乃至南洋諸島との間に於て彼我の漂著漂流が屢起つたことから察すると是等殊域の土俗土物が臚氣ながら我國に傳はつたことは確である。一二の實證は史に明記する通りである。平安朝の初期唐末に近き頃高丘親王が入竺倭國僧金剛三昧西陽雜俎の如く印度に求法の途空しく馬來半島の邊に骨を曝し給うた様な事實は定めし他にも例がありながら文献に漏れて居るであらうと考へる。

其時代に唐國に來往する者に恐れられた南海は必ずしも今日の南洋附近を指すものではなく昔時の琉球即ち今の臺灣近傍をも呼んだことがある様である。菅原梶成(遣唐知乘船事)が漂著した南海賊地の如きも、之を空海や圓珍の入唐した船が戦々兢兢々通過した臺灣近海と見られぬこ

日本と南國との關係

ともあるまい。竹取物語の大伴御鞆が、其漂著した濱邊の「南海にあらざりけり」と喜んだ話も當時南海恐怖の觀念をあらはして居るが、よしや同じく物語であるにせよ、この場合の南海は、宇津保の波斯のやうには遠洋を考へたことと見做されぬ。

南海の文字に次いで南蠻といふ名稱は、平安朝中期より史上に散見する。一條天皇長徳三年十月一日宋太宗至道三年 西紀九九七年太宰府より飛脚で朝廷に報じた所によるに「南蠻亂入管内諸國奪取人物」とあつて同月神佛に祈禱する様な騒ぎを始めた所へ翌十一月二日に府使が来て「伐獲南蠻四十餘人」と報告し、越えて同五日官符を太宰府に下して更に討伐を命ずる始末になり、翌長徳四年九月及び其翌長保元年八月の二回の上申では南蠻の捕獲追討を行つた由に見える。この事件は日本紀略に載する所であるが百練抄には長徳三年の條に「高麗國人虜掠鎮西」と見え同四年二月「大

宰府追伐高麗國人」とあり南蠻を高麗にしてある。徳川時代の史籍にて鎮西要略は多少記事の相違を以て南蠻海賊と記し蝨蠅抄は二説に對して不知孰是と逃げ、大日本史は一條帝紀には百練抄に據り外國列傳球には日本紀略を採つた様な矛盾がある。國史眼以下大抵高麗説である。當年高麗國牒無禮の事件も史に見え、前には遠く新羅の不穩、後には近く刀伊女眞の來寇もあれば、高麗とする方が解し易いには違ない。然し如何にして高麗を南蠻と誤つたのであらうか。南下して九州の西南邊を襲撃した爲に斯様な風説を生んだものか又は後世の誤記か頗る疑はしい、二者の混同に就ては別に他日細論するつもりである。然るに尙一つ南蠻來寇の事件がある、それは長徳長保以後二十餘年目の後一條帝寛仁四年宗天禧四年 西紀一〇二〇年に於て「南蠻賊徒到來薩摩國虜掠人民等」と太宰府から報じて來た二十九日事件で左經記左大辨 源經頼に見えて居る。是も翌年早々追討す

べき由の官符が府に下された。右再度の入寇は刀伊來攻の翌年でもあり且又其年に高麗牒狀の件もあれば、長徳の件と同様に眞の南蠻ではないと解する方がよからう。然し他にも平安朝に而も太宰府あたりで北狄を南蠻と誤解した様な例がある。又月輪兼實鏡の如く、南島貴賀井島をも高麗と認めた様な自然的誤解とは反對に、京都の公家が不自然にも一般的名称の高麗の代りに特殊な呼方の南蠻の文字を用ゐたのは解しかねるのである。

但し故らに南方から蠻夷の來寇した様な事は不可能たるに相違ない。又前後に例もなき琉球又は其他の薩隅西南諸島人の襲來があつたとも思へない。けれども偶然漂來の南蠻人が言はば居直強盜の格にて九州の沿海又は島嶼の警備の届かぬ土地を荒掠し、それが風聲鶴唳で誇張された様な事はなかつたらうか。例へば玉葉の承安二年七月九日の條に人よ

南蠻の漂來

大食人の高麗通交商

りの傳聞として伊豆の一島に南海の蠻夷と見ゆる鬼形の者五六人紫檀赤木等の類を以て造つた珍奇な船一艘で來著し島人を脅かした事が見え國司から右少辨親宗を経て奏聞したとある。古今著聞集には同じ事件を叙して「鬼八人其かたち身八九尺計にて髪は夜叉の如し、身の色亦黒く眼まろくして猿の目の如し、皆裸なり、身に毛おひて蒲をくみて腰にまきたり、身にはやう／＼の物のかたをえり入たり」と記し其風貌南洋土人を想見せしむるものがある。されば前記の南蠻は此種漂民の寇掠か、さもなければ漂著海商の強奪の嵩じたものではあるまいか。姑く記して疑を存する。

左經記に見ゆる南蠻賊徒虜掠に後る、こと數年と更に十數年後と都合三回高麗に大食國の商人が來た事は高麗史に見えて居る。

(1) 顯宗十五年(後一條萬壽元年)九月大食國悅羅慈等一百人來獻方物(西紀一〇

日本と南國との關係

(2) 同十六年九月辛巳大食蠻夏詵羅慈等百人來獻方物

(3) 靖宗六年(後朱雀長久二年)十一月丙寅大食國客商保那盍等來獻水銀龍

齒占城香沒藥大蘇木等物命有司館待優厚及還厚賜金帛西紀一〇

當代日宋の交通貿易は高麗まで再三出入した大食海商を日本の沿岸に引付ける媒とはならなかつたものか。本邦の記録は明に之を語らない。嘗て唐朝參賀の式に遣唐副使大伴古麻呂が東畔第一大食國の上に列したいといふ壯快な話の外は彼我の關係に就て傳ふる所がない。但し往昔新羅の名がアラビヤ人に聞えて居た事は茲に特記する迄もなからうと思ふ。院政時代の傳來と覺しき江談抄及び二中歴に見ゆる波斯語なるもの其實馬來語であることは先覺の論定あり、從て茲に所謂波斯を南洋の一地方と見做す我一史家の推斷は正當である。宋景祐の序ある廣燈錄中の一頰にも南海波斯進象牙の句あれば諸蕃志英譯本脚注のヒルト等の説

は愈眞とするに足りる。物語は事實の反映でもあるから年代は遡るが清原俊隆の漂流した宇津保の波斯も、矢張南洋のそれとしておいてよからう。同じく延喜を稍上る頃の撰なる佐世の日本國現在書目の波斯字樣登の如き、又天平中渡來の波斯人李密翳の如き、何れも南蠻のそれではなく西域のものであらう。鎌倉時代の中期に近き頃慶政上人が泉州に於て「南番文字」の詩句を南番の僧に書いて貰つたのが現存するが、これは其語其字全く西域の波斯のものであること近年の考證によつて明かである。

三

足利時代に出でたる通俗辭書下學集元年を始めて許多の節用集にも南蠻の二字は見えるが古語の採録だけであつて何等當用の義を有たぬ。糸亂記に應永頃の堺港に「吳越三韓南蠻」の商船入津の盛況を記るすも、此

條は享保の追記にて而も文飾に過ぎないから、時勢からの推理ならば兎も角、史料としては價値がない。應永二十六年五月二十三日「大唐國南蠻高麗等」來攻の報が看聞御記に見えるがこれは平安朝の記録に載するよりも更に奇怪な書様であつて實際支那や南蠻は參加してなかつたのである。然し一方には支那朝鮮の外に第三の外來民族の存在を認識して居た證據にもなるから、直に棄て、仕舞ふべきではない。それは後に説く所の應永十年代兩三回若狹に南蕃船が入津した事實が傍證ともなり得るのである。爾來天文十二年に至るまで我國と關して南蠻の文字を用ゐたる一二の記録があるが後に至て擧げることにする。南浦文集の鐵炮記には初渡の葡人を西南蠻種之賈胡と書いたが、是は無論後年の追記であつて歐人渡航の初期には天竺また天竺人と呼んで居たことは天文二十年の大内義隆記並に同年西紀一五のフランシスコ・シャビエルの書簡にChy

天竺人

nehico 又 Chinghinguo と綴る通りである。名高い天文二十一年周防介の造寺免許狀には西域來朝之僧云々と出て居る。印度の臥亞から來たといふ意味もあらうし、宣敎の師徒が故らに裝うて爲にする所があつたからでもあらう。歐人を南蠻と稱するは現在の記録では信長記天正八年八月二日大坂津に「唐土高麗南蠻之舟」の集ふ有様を叙した條などが古い方ではなからうか。大内記には「唐土天竺高麗ノ舟」が要津に出入する趣を記してあるのと參照すべきである。天正年中より段々南蠻と稱する様になつたが、さう混同するに至つたのは倭寇以來當然の因縁である。

四

應安四年十二月三十日義堂が日工集に、入元歸朝僧中岩の語を引いて「凡船上某物皆南蠻及日本等國船所賣藥材也」と記載したのを見ても其

日本と南國との關係

日本と南國との關係

頃南蠻が既に朝鮮支那の二國以外に外國の第三要素として邦人の意識中に幾分明に存して居たことが分る。其後三年應安七年一三九四渡來のいはゆる天竺人ヒシリ（聖）及其妻子等の事は既に一二の史家の發見講述に由て知らるゝに至つた通りで予輩は茲に細説せぬ。唯彼が絶海に世話を受け、初め相國寺に來り、義滿に愛用せられ、後日本婦人を娶つて二子を擧げ兄の西忍に幼名ムスルと附けてあつた事があり、其名がアラビヤ流に見える所から右の天竺人ヒシリは亞刺比亞人或は波斯邊の人であらうと從來推斷されて居る様であるが、大食の文化を受けた馬來半島又は南洋諸島の者とも考へられる。例へば瀛涯勝覽に「俗尙回回教持齋受戒」とも見えて居る滿刺加人なども見得るのである。「遠く延曆年中崑崙人（馬來族）が天竺人と傳へられた事もあつた。」彼が如何なる徑路によつて日本に來たか種々の推測が容るされるであらう。

兎も角も准亞刺比亞系とも云ひ得べき天竺人渡來後十五年暹羅の使節が日本の何處かに來た事があるのは、本邦の記録には關して居るが高麗史には載つて居る。即ち恭讓王辛未三年西紀一三九一年秋七月の條に、

戊子、暹羅斛國、遣奈工等八人來、獻土物、致書曰、「暹羅斛國王今差奈工等爲使管押舡隻裝載出產土物進奉高麗國王、無姓名封識、但有小圓印、亦不可考驗、國家疑其僞、議曰、「不可信、亦不可以不信、且來者不拒、待之以厚禮遠人、不受其書以示不惑可也、」王引見勞之、對曰、「戊辰年受命發船至日本、留一年、今日至貴國、得見殿下、頓忘行役之勞、」王問帆程遠近、對曰、「北風四十日可至、」其人或相或跣、尊者用白布韜髮、其僕從見尊長、脫衣露身、三譯而達其意、と見える通りである。本文の首にある奈姓の人は、同國に甚多く、又本

日本と南國との關係

暹羅使節
の入鮮と
倭寇

文の末に記す所は宛然同國の風俗に相違ない。而して戊辰年とは右辛未に先だつ三年なる我嘉慶二年一三八八に當る。國使來聘の事は日暹交通史上重要な事であるにも拘はらず我舊記の漏らしたのは惜むべきである。無論西國邊に於る私交ではあらうが一年滯留中に其事が京畿に傳説されぬのは何故か。而も戰亂既に下火になり翌康曆元年三月には義滿の嚴島參詣があつた位であるのに。

高麗は其末期に際して暹羅の使節を還し國交を斥けたが、朝鮮新王國になつてからは再び之を容れたと見え、太祖六年に暹羅の使者が再渡した。然るに今度は倭寇に妨げられ一旦は虜へられたが逃れて國都に來るを得た。其頃は慶尙道蔚州浦の邊に倭寇の巨魁羅可溫と云ふ者が太祖李成桂に降服した時であつて彼の使節と此の倭魁とは殆ど同時に入京して謁見した。即ち太祖實錄、丁丑六年西紀一三九七年の條に、

扶南

四月乙巳暹羅解國使者林得章等六人爲倭所虜逃來、賜得章等四人各衣一襲及從人○戊申上坐勤政殿受朝以降倭羅可溫序於朝班東八品班頭、稍後暹羅斛人序於西八品班頭、

とある。以後暹羅が日本及び朝鮮と交通した形跡は不明であるが、七年經ての永樂二年には琉球に船を通じて居た事は明史に由て知られ、又琉球國志略でも分る。

抑も暹羅地方に關する記事の古史に見ゆるは日本書紀欽明帝四年梁武同九年百濟聖明王帝大二十二年西紀五四二年の下に九月一日「百濟獻扶南貨財及奴二口」とあるのが初めてであつて、扶南は大體に於て暹羅の領域を占めて居たのだから、此記事は日暹の交通前紀の資料として大切である。扶南が大同五年梁に入貢したことは梁書扶南傳に、百濟が聖王十九年即ち大同七年其前（其前にも）梁に朝貢したことは三國史記百濟本紀に載つて居るから、扶南人が

日本と南國との關係

日本と南國との關係
韓半島の一隅に來往の事も察知される。爾來八百五十年初て日鮮兩土に於て暹國關係の事項が史に見えたわけである。

五

次に若狹の小濱附近に應永十五年以來二三回入津した南蠻船の話は極めて著名であつて後鑑等幾多の史書に載つて居るが、今更めて攻究を要する事があるから煩を厭はず詳述しようと思ふ。第一の類從本の若狹國稅所今富名領主代々次第に次の如き記事がある。

(1) 應永十五年六月二十二日に南番船着岸、帝王御名亞烈進卿、番使々臣本阿 彼帝より日本の國王への進物等生象一疋黒山馬一隻、孔雀二對其外色々、彼船同十一月十八日大風に中湊濱へ打上られて破損之間に同十六年に船新造、同十月一日出濱ありて渡唐了

(2) 同十九年六月二十一日南番船二艘着岸有之、宿は問丸本阿彌、同八月二十九日に當津出了、御所進物註文有之、
(3) 同二十年三月己丑小濱着岸之鐵船之公事、自内裏可有御直納之由依武家被仰出之、當御管領細川右京大夫殿御教書應永十九年十二月三日被成一色殿了、同二十年三月日當所被仰下了、
同書一本書には進物目錄に鸚鵡二對を附加し、後鑑所引の和漢合符には應永十五年七月「南蠻國貢黒象三頭鸚鵡大鷄等」と見え、同東寺王代記には七月二十二日「黒馬自唐引進高サ六尺餘」と記してある。今富庄は一色氏の知行である。而して南蕃が應永十五年一四〇八以後三回若狹を通じて京都に進貢したのであるが、同年義滿の薨後も尙着岸したのである。以後の來貢は絶えたのであらう。若狹には王朝に於て長徳元年宋商の一時入津したこともあり、百練抄 足利以降に於ても其要津海外より注目

日本と南國との關係

されたことが史に散見する。海東諸國記に北陸道七州の中若狹州のみ朝鮮と交通した様に記し、閩書及び圖書編などには攝摩(攝津)伊勢(洞津)若狹(小濱)博多を併稱してあるのでも一斑が分る。又戦亂の際九州より京都に入るのが困難な場合には日本海より往き若狹を過ぎて上洛する例もあることは海東諸國記山城州丁亥卯酉及史料としては少し怪しい南蠻寺興廢記などで知られる。されば南蕃の若狹入津は直に偶然漂到の結果とも定められない。日本海海流の自然力の問題は姑く別として、日本及び朝鮮、内外の人事をも究めてかゝらねばなるまいと思ふ。

さて上記の記録に見ゆる南蕃は其所謂帝王亞烈進卿の名によつて判ずると、蘇門答刺島の東南部に位する三佛齊國の後なる舊港ではないかと思はれる。明史三佛齊傳に、洪武三十年三佛齊は爪哇に亡ぼされてから名を舊港と改め廣東人梁道明が之に據つたこと、成祖永樂三年(一四〇

五舊港の頭目梁道明が入貢し、副頭目施進卿が代領したこと、同五年(一四〇七)鄭和が「西洋」より還る時舊港頭目陳祖義が明軍を詐謀を以て劫かさうと試みた時、右の施進卿が兵を以て祖義を戮したこと、尋で進卿は其婿を遣はして朝貢したるによつて舊港宣慰使司を設けて進卿を宣慰使としたことが記載されて居る。成祖實錄も略同じである。帝王亞烈進卿の遣はした南蕃船が日本に航し若狹に著いたのは其翌年の應永十五年(一四一八)即ち永樂六年であるから、年代も確に合ふ。而して亞烈又は阿烈は殊に爪哇にあつて尊稱として用ゐらるゝらしく、明史爪哇傳に、正統元年使臣馬用良言、先任八詔來朝、蒙恩賜銀帶、今爲亞烈秩四品、乞賜金帶、從之と見ゆるそれであつて、成祖實錄永樂二年三年五年の條にも爪哇國西王の使者に阿烈干都萬、阿烈安達加李奇、亞烈加恩などの名が出てをり、三年の條には渤泥國使に阿烈伯成の名を認めた。されば舊港の頭目